

## 肥前浜城と島原城下町の復元的考察

西田, 博

<https://hdl.handle.net/2324/1833528>

---

出版情報 : pp. 1-, 2017-06-15  
バージョン :  
権利関係 :



はまのじょう  
肥前浜城と島原城下町の復元的考察

西田 博

2017 年 6 月 15 日

キーワード：浜城、島原城、城下町、島原大変、筑前筑後肥前肥後探索書

Reconstruction of Hama Castle and the Castle-town of Shimabara

Nishida, Hiroshi

June 15, 2017

Keywords: Hama Castle, Castle-town of Shimabara, 1792 Earthquake in Unzen, An Intelligence Report on Chikuzen, Chikugo, Hizen and Higo Provinces.

Abstract: The 1792 earthquake in Unzen caused the eastern flank of the Mayuyama dome to collapse, and the site of the Hama Castle and the southern half of the Castle-town of Shimabara, to be buried under the earth. Due to absence of accurate maps and scarcity of documents as well as topographical data, the castle and the castle-town has not been a subject of study for quite a long period of time. This thesis is about reconstructing the plan of the Hama Castle and the Castle-town of Shimabara, by analyzing every detail of documents and maps, and by focusing on features of the early Edo period maps. The study has unearthed several facts about how the city of Shimabara had been formed before the earthquake.

# 目 次

---

|                                                  |    |
|--------------------------------------------------|----|
| I. はじめに                                          | 3  |
| II. 例言                                           | 4  |
| III. 城名の表記と発音                                    | 5  |
| 1. 城名の表記                                         |    |
| 2. 城名の発音                                         |    |
| IV. 浜城の歴史                                        | 7  |
| 1. 戦国期                                           |    |
| 2. 有馬氏時代【戦国期～慶長 19(1614)年】                       |    |
| 3. 鍋島氏・大村氏預かり時代【慶長 19(1614)年～元和 2(1616)年】        |    |
| 4. 松倉氏時代【元和 2(1616)年～寛永 14(1637)年】               |    |
| 5. 小笠原氏・来島氏預かり時代～高力氏時代【寛永 15(1638)年～寛文 8(1668)年】 |    |
| V. 埋没した島原城下町の復元                                  | 14 |
| 1. 作成されなかった実測図                                   |    |
| 2. 島原城下通り筋の埋没状況                                  |    |
| 3. 島原大変以前における島原城下通り筋の復元                          |    |
| 4. 島原城下町大手川以南の形成過程                               |    |
| VI. 浜城の位置と構造                                     | 23 |
| 1. 浜城の位置                                         |    |
| 2. 浜城の構造                                         |    |
| VII. 復元に用いた歴史地理資料                                | 26 |
| VIII. 註                                          | 32 |
| IX. 参考文献                                         | 34 |

## I. はじめに

---

肥前国浜城は、島原半島 4 万石を領知した松倉氏が、元和期から寛永期にかけて約 9 年間居城とした城である。城には本丸・二ノ丸があり、外曲輪・侍町・惣構えを備えていたという(宮本 2013,10-7 頁)。この城と城下町は、おそらく中世島原の町割りを継承しつつ築城・町立てされ、そして寛永期に町立てされた近世島原城下町の祖形ともなった(宮本 2012,46 頁)。

しかしこの浜城と城下町は、これまで主な研究の対象となることはなかった。理由はおそらく、史料の僅少さにあるのであろう。浜城は近世のごく初期のうちに城としての機能を失い、そのうえ、島原半島を領知した有馬氏・松倉氏・高力氏が転封・改易などの処分を受けている。史料は比較的残存しにくい状況にあった。加えて寛政 4(1792)年、背後に聳え立つ眉山が突然崩壊、おびただしい量の土砂【註 1】が流れこんだことにより浜城とその城下町を継承した島原城下町(南半分)は地中に埋もれ、その歴史地理学的な研究はかなりの制約を受けることとなったのである。

本稿の目的は、土砂に埋もれた島原城下町の通り筋を現在の実測図上に特定、さらには浜城の位置・構造を明らかにすることにより、中世から島原城下町立てにいたる都市形成過程の一端を明らかにすることにある。用いた史料には二次史料、あるいはデフォルメが著しい絵図史料も含まれるが、複数の史料の論理的整合性を追求しつつ、あるいは近世初頭の絵図に見られるデフォルメの特徴を明らかにしつつ、それらを有機的に用いることで空間構造の復元を試みた。

本稿は主に、IV章～VI章により構成される。IV章「浜城の歴史」では、戦国期から近世初頭までの浜城の歴史を概観し、次いでV章「埋没した島原城下町の復元」では、絵図に記された通り筋の間数を現代の実測図上にたどることで埋没した島原城下町の通り筋の復元を行い、併せて海岸線を推定した。また、町割りとその形成過程についていくつかの知見を得ることができたのでそれについても述べている。そしてVI章「浜城の位置と構造」では、浜城(遺構)の位置、規模および構造を明らかにした。

VII章「復元に用いた歴史地理資料」では、本稿で用いた歴史地理資料について概説し、特に近世初頭の絵図に特徴的なデフォルメについて考察している。V章の一部はVII章に基づいており、それゆえ演繹的に論を進めるのであれば本章は第V章の前に置くのが望ましいが、註釈としての役割が大きいのので、あえて最終章としたものである。

今回判明したことは、浜城・城下町および埋没以前の島原城下町の全体像のごく一部に過ぎない。また今回用いた手法では、城下町南西の街村部分の復元は不可能であり、後考を俟つほかない。発掘調査の可能性も含め、浜城・城下町そして島原城下町の研究は進展の余地を十分に残していると言えよう。

## Ⅱ. 例言

---

- 1) 江戸初期に広く読まれた数学書では、1間を 6.5 尺としている(大矢 1977,129,176,237 頁)。またⅦ章で明らかにするように、島原城下町の通り筋を復元する上で基礎資料とした「島原大變前の島原絵図」に記された間数もまた 1 間を 6.5 尺としたものである(Ⅶ章 絵図 1 参照)。これにならない本稿では、近世の文献については 1 間を 6.5 尺とした。ただし、明治中期の文献については、1間＝曲尺 6 尺で換算している。
- 2) 本稿では、(曲尺)1 尺＝0.30303m として通り筋の長さを換算した。
- 3) 史料の引用にあたり、いわゆる旧字体は新字体に置きかえた(例: 濱⇒浜)。
- 4) 絵図史料等については特に、「Ⅶ. 復元に用いた歴史地理資料」を設け、考察を加えた。
- 5) 島原関連の地図はすべて西を上としている。多くの島原城下絵図にならったものである。

### Ⅲ. 城名の表記と発音

#### 1. 城名の表記

近世の史料における浜城の表記については、以下の4例を確認している。

- 浜 城 … 「島原一揆松倉記」(国書刊行会 1970a,428 頁)  
「島原合戦絵図」(島原市教育委員会 2016,139 頁)  
浜 の 城 … 「肥前国有馬古老物語」(国書刊行会 1970b,591 頁)  
「有馬原之城兵乱之記」(林 1954b,124 頁)  
浜 之 城 … 「肥前国高来郡島原城図」(Ⅶ章 絵図 3)  
「肥前国有馬古老物語」(国書刊行会 1970b,591 頁)  
浜ノ古城 … 「島原城廻之絵図」(Ⅶ章 絵図 11)

以上の例を見ると、「浜」と「(古)城」の間に「の」(または「ノ」「之」)のいずれかを入れることがあるがこれは、発音するときは「の」を落とすことなく発音していたことを示している。近世前期史料の城名に「の」を入れる例については既に指摘されており(白峰 2003,241 頁)、浜城も例外ではないといえる。なお、この「の」は、連体格を示す格助詞であり、その用法は「固有名詞による限定」、意味は「～という(名の)」である(新村 2008,2184 頁)。

#### 2. 城名の発音

「浜」の読みは一般に、「はま(訓読)」か「ヒン(音読)」のいずれかであるが、『日本地名総覧』を見ても、地名の「浜」を「ヒン」と読む例は全くない。一方で、「浜」を「はま」と読む地名は 16 都道府県に及ぶ(地名編纂委員会 1990)。地名と深い関わりのある日本の苗字についても、「浜」を「ヒン」と読む例は、苗字 8 万のデータベースに一例も見当たらず(日外アソシエーツ編集部 1998)、「浜」を「はま」と読むことはほぼ確実であると言える。

また前項で述べたように、「浜城」を発音する場合は、「浜」と「城」の間に「の」を入れていたと考えられる。ヨーロッパ宣教師による記録・報告書またはそれに基づく歴史書、軍記物に記される振り仮名も傍証となるであろう(表Ⅲ-1)【註2】。

「城」がどのように読み慣わされていたか、明快に答えてくれる史料は管見の限りないが、肥前国の他の城郭の読みについて、近世前期の史料を整理すると表Ⅲ-1 のようになる。これらの例から帰納的に考えるならば、「浜城」の「城」の読みは「じょう(じやう)」であつたと推論できる【註3】。このことを裏付けるように、『日葡辞書』(1603 年刊行の日本語・ポルトガル語辞典)にも、「城の内に引き退く」を「じょうのうちにひきしりぞく」と読んだ例、さらには、「城を落とす」を「じょうを落とす」と読んだ例などが掲

載されている(土井ほか 1980,367 頁)。

以上のことから城名の読みは、歴史的仮名遣いでは「はまのじやう」、現代仮名遣いでは「はまのじよう」、発音はカタカナで「ファマノジョー」、国際音標文字(IPA)では/ɸamanodʒo:/と推定される。

| 城郭名        | 史料上の表記          | 歴史的仮名遣い/<br>現代仮名遣い  | 出典                                      | 備考                                                        |
|------------|-----------------|---------------------|-----------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| 多久城        | Tacunojó        | たくのじやう/<br>たくのじよう   | フロイス『日本史』<br>(松田 1979, 128 頁)           | ポルトガル語の音韻体系による、「タカクノジョー」のローマ字表記【註4】                       |
| 高来城        | たかくのじやう<br>高来之城 | たかくのじやう/<br>たかくのじよう | 高知県立図書館山内文庫本<br>「島原記」(宝永元年刊)            | 「高来城」は築城当初における島原城の呼称(林 1954a, 899 頁)。                     |
| 原城<br>(春城) | Farounojô       | はるのじやう/<br>はるのじよう   | パジェス『日本切支丹宗門史』(Léon Pagès 1869, p. 844) | フランス語の音韻体系による、「ファルノジョー」のローマ字表記【註4】                        |
| 原城         | はら じやう<br>原の城   | はらのじやう/<br>はらのじよう   | 高知県立図書館山内文庫本<br>「島原記」(宝永元年刊)            | 「はらのじやう」は幕府上使らによる呼称で、のち広く用いられるようになった(堀内 1931, 202 頁)。【註5】 |
| 原城         | はらのじやう          | はらのじやう/<br>はらのじよう   | 「志方半兵衛言上覚」(鶴田 1994, 542 頁)              |                                                           |

表Ⅲ-1 肥前国における城郭名の読み

## IV. 浜城の歴史

### 1. 戦国期

戦国期の史料には、「島原の城」という城名が散見される。ヨーロッパ宣教師の書簡・記録、島津側の史料、龍造寺側の史料などである。そのうちいくつかは一次史料であり、「島原の城」が戦国期に存在したことは疑いない。

ヨーロッパ宣教師の書簡・記録では、「島原の城」はポルトガル語で、Fortaleza de Ximabara と記されることが多い。fortaleza は「城」・「砦」という意味で、これは単数形であるから、複数の城からなる有機的な城を意味するのではなく、単一の城であることが分かる。de は、「～の」という意味で、英語の of に近い。そして、Ximabara は「シマバラ」の、ポルトガル語の音韻体系によるローマ字綴りである。

ヨーロッパ宣教師の書簡・記録の例を一つあげると、天正 12(1584)年、有馬晴信が島津家久の援軍とともに龍造寺方の「島原の城」を包囲しているところを、城の救援のため、龍造寺隆信が大軍を率いて駆けつけたという、いわゆる「島原合戦」に関する記事がある(1584年8月31日付フロイス書簡)。そこには、島原の城が、有馬の領地の主なる城であること、龍造寺隆信が佐賀から島原の城へ糧食及び酒を送ろうとしたこと、隆信が派遣した大村の兵 300 が島原の城に入ったこと、さらに隆信が兵 5000 を島原の城に入れようとしたこと、晴信は大砲 2 門によって城を攻撃したこと、「沖田畷(おきたなわて)の戦い」ののち開城したことなどが記されている(村上 1969,335-351 頁)。

この「島原の城」と「浜城」とを同一視する見方もあるが、出典が明示されていないか、または孫引きであって、出典を遡って調べてみても歴史史料やその活字資料を典拠としたものではない。確かに、浜城を「有馬氏の別堡」、あるいは「有馬氏修理大夫家来居城」とする史料があり、さらには有馬氏転封ののち鍋島氏が浜城を預かったとする史料もあるが(本章第2項・第3項で詳述)、有馬氏は慶長 19(1614)年まで島原を領知していたから、これをもって戦国期の築城と断じることはいできない。外山幹夫氏は、戦国期の「島原の城」を、森岳(もりがたけ)、すなわち、現在コンクリート造の白亜の天守がそびえ立つ辺りに比定し(外山 1997,149 頁)、中西豪氏は、森岳城・戦国期島原城・浜城をそれぞれ別個の城郭と考えている(学習研究社 2008,89 頁)。

### 2. 有馬氏時代【戦国期～慶長 19(1614)年】

前項で述べたが、浜城を有馬氏の支城とする史料が二点ある。いずれも後世の地誌であるが、以下に引用する。

「一、古城跡壱ヶ所 有馬修理大夫家来居城と申伝。今は漁師町二成。」

——古城跡一カ所 有馬晴信の家臣が居城としていたと言い伝わる。現在は漁師町となっている。

これは宝永期に成立、のちに改訂された「島原大概様子書」の記述の一部である(林 1954c,319 頁)。「漁師町」は「船津町」と同義と考えられるから(鏡味 1977,154 頁)、「漁師町」は浜城跡地に付された地

名「船津町」に相当するものであろう。

もう一点は、長崎歴史文化博物館に蔵する「庶務課史誌挂事務簿 南高来郡村誌」で、明治 14 (1881) 年、皇年国地誌編纂事業のために作成された史料である。その「島原町」条に次のような記述がある。

「松島古城址 町ノ南凡八町ニ在リ。今ノ松島町、元ト船津浦ト云。舟津浦より入江ヲ隔テ、松島ニ連子、城堡ノ故址アリ。有馬氏ノ別堡ト云。寛政地変ニ因テ、湾内皆陸地トナリ、旧形ノ見ルヘキ無し。」

——松島古城址 町の南、およそ八町のところにある。現在の松島町は、その昔、船津浦と呼ばれていた。船津浦より入江の海を隔てて、松島まで連なり、城塞の古址がある。有馬氏の支城と言われている。寛政の地変によって、湾内はことごとく陸地となり、往時の地形をうかがい知ることはできない。

ここで、「町」というのは、長さの単位で、60 間に等しいものである。史料が書かれた明治 14 年当時はずでに、1 間を曲尺の 6 尺とする慣行が定着していたので(佐藤 1996,121 頁)、8 町はおよそ 873m ということになる。また明治期まで、カタカナの「ネ」は「子」とも書いたから、「松島ニ連子」は、語法に多少の疑問が残るものの、「松島に連ね」と読みかえることができるだろう。

この「松島城」を、江戸時代の松島、すなわち現在「天如塔」が立つ小高い丘(現在、島原市弁天町 1 丁目)に比定する刊行物も見られるが(長崎県教育委員会 2010,175 頁)、文脈から「松島城」が「島」だけでなく、船津浦と呼ばれる陸地側にもあったことは確実である。

以上二点の史料は、有馬氏が日向へと転封された慶長 19(1614)年までに、有馬氏の支城として機能した時期があったという記録あるいは伝承があったこと示している。

### 3. 鍋島氏・大村氏預かり時代【慶長 19(1614)年～元和 2(1616)年】

有馬晴信は岡本大八事件ののち、慶長 17(1612)年に所領を没収され、嫡子直純がその跡目相続を許される。しかし、その直純も慶長 19(1614)年、日向へ転封となった。「肥前国有馬古老物語 北有馬村農夫覚記」は、その後の様子を次のように伝えている(国書刊行会 1970b,591 頁)。

「其跡北目は大村丹後守様、南目は鍋島様御預りにて有馬日野江の城、同原の城者、内田舎人殿と、鍋島七左衛門殿、多久長門殿御番被成候、島原村浜の城者、綾部左京殿、中野甚右衛門殿御両人御番被成候、浜の城者、圀のため堀をほり、土手を築被成候により、肥前堀と申也」。

——有馬氏が日向へ転封となったのち、北目(およそ現在の島原市)は大村氏が、南目(およそ現在の南島原市)は鍋島氏が預かることとなり、日野江城および原城は内田舎人・鍋島七左衛門・多久長門が、島原村浜城には綾部左京と中野甚右衛門が定番として入った。浜城については、防禦のために堀を掘り、土手を築き、堀は肥前堀と名付けた。

浜城に在番として入ったとされる中野甚右衛門は、中野甚右衛門(神右衛門)清明であり、「葉隠」の著者、山本常朝の祖父にあたる。清明は沖田畷の戦いにも参加、武功をあげた人物で、慶長

6(1601)～7(1602)年頃には佐賀城の十間堀の整備を命じられているから(鍋島報効会 2016,20 頁)、その経験により浜城の城郭整備を命じられたとも考えられよう。綾部左京も、江戸時代初期の佐賀藩史料にその名を見ることができる(佐賀県立図書館 1972,121,199 頁)。

#### 4. 松倉氏時代【元和 2(1616)年～寛永 14(1637)年】

元和 2(1616)年 6 月、有馬氏にかわって松倉豊後守重政が入封、島原の領主となり、同年 12 月に浜城に移る(国書刊行会 1970b,591 頁)。「有馬原之城兵乱之記」には松倉重政が縄張りした城の一覧があるが、その中に浜城が含まれており(林 1954a,124 頁)、松倉重政による築城または改修と考えられる。実際、「肥前国高来郡島原図」(Ⅶ章 絵図 3)を見ると、浜城には、総石垣、瓦ぶきの建築、横矢がけなど、織豊系城郭に特徴的な技術が用いられており(千田 2003,156 頁)、近世以降の築城または改修であることは明らかである。松倉氏によって築城(または改修)がなされたのであればその時期は、元和 2(1616)年 6 月から 12 月の間のこととなろう。

さて、この「肥前国高来郡島原図」には次のような注記がある。

「浜之城 是ハ豊後守殿此城普請ノ時ノ居城ナリ」

——浜城 島原城の普請中、松倉豊後守重政はここを居城(いじょう)としていた。

松倉重政が浜城に移ったのは元和 2(1616)年であり、島原城は元和 4(1618)年から寛永元(1624)年にかけて築城工事が行われたといわれているから(国書刊行会 1970b,591 頁)、重政は約 9 年間、この浜城を居城としていたことになる。この間の領地および支配機構を「浜藩」と呼んでも差し支えないだろう。

ところで、寛永 4(1627)年に作成された「筑前筑後肥前肥後探索書」(Ⅶ章 絵図 7)によれば、浜城は島原城の出丸と認識されていたことが分かる(白峰 2006,176 頁)。「出丸」(でまる)とはこの場合、「城の本体から少し離して別郭をなしたもの」(鳥羽 1995,212 頁)と定義されるものであり、豊臣期大坂城の真田丸(さなだがまる)、佐賀城の清心院・天祐寺などの例がある。また仙台のように、城外の要地に寺院を置いて城郭と連繫して堅固な防御陣地を構成するケースは多い【註6】。浜城は湾口を守る要の地にあるので、出丸を置いたとしても不自然ではない。また、元和一國一城令ののちに、島原城とは別個の城郭の存置が認められたとはおよそ考えられないだろう。浜城は少なくとも表向きは、島原城の出丸とされていたようである。

さて、その「筑前筑後肥前肥後探索書」によれば、浜城の規模は、東西 55 間(約 110m)、南北 25 間(約 50m)で、石垣の高さは 2 間(約 4m)、そして三重櫓が 1 カ所、二重櫓が 3 カ所、多門が 1 カ所、(只の)矢倉 2 カ所、門矢倉が 1 カ所あったという(Ⅵ章で詳述)。

「肥前国高来郡島原城図」(Ⅶ章 絵図 3)と「島原城廻之絵図」(Ⅶ章 絵図 11)とを見くらべると、浜城の北側、およそ現在のアーケードから東については、海だったところを埋め立て、その上で町立てをしたことが分かる(図Ⅳ-1、図Ⅳ-2、図Ⅴ-4)。その時期は明らかではないが、以下①～③の事実から、埋め立ては、寛永 2(1625)年から寛永 4(1627)年の間になされたと考えられよう。

- ①寛永 2(1624)年、高島にあった鷹島大権現を、島原城の東の海岸に移転(島原市教育委員会 1998,5 頁)、その後の寛永 4 年 3 月、高島を切り崩した土砂を用いて埋め立て工事が進行中であった(Ⅶ章 絵図 7、図 V-4)。
- ②「肥前国高来郡島原城図」(Ⅶ章 絵図 3)には、寛永元(1624)年に完成した島原城や、移転後の鷹島大権現(上記①)らしき施設が描かれる一方で、埋め立て工事は未だなされていない様子が描かれる。
- ③寛永 4(1627)年 3 月の「筑前筑後肥前肥後探索書」(Ⅶ章 絵図 7)付図には、埋め立てがほぼ終わってはいるものの、町立てが未だ進んでいない様子が描かれる。

高島周辺の埋立てについては「筑前筑後肥前肥後探索書」に詳しい。以下に引用する。

「一、舟入二舟を引のほせて置申所、壱そう壱そう(原文くの字点)ニ石垣をつき、上二舟蔵を作り申拵仕候、我等見申時、舟四そう分のほせ申石垣出来申候、又壱つ出来かゝり申候、何程も出来申と見へ、地行を引候所、今出来申をそへ八十間、地を拵候て御座候、上二在申舟蔵場組申を見申候、三十間斗の長さ二見へ申候。／一、此地つゝき海の方ニ壱町四方程の高島と申小山の島を、かこ・鉄砲之者五六百人ニ而四五日地行御引之由、我等見申候時も、百程ニ而地引海ハうめかけ広く仕候、何そたち申かとい申候、何と御座候も不存候と申者も有、大工ニ尋申候へはしほ浜ニなると哉覽と申候由申候。」

—— 一、舟入に、舟を引き上げて置く所があり、一艘分ごとに石垣を築き、その上に舟蔵を作るという構造である。私(探索書の筆者)が見た時、舟 4 艘分を引き上げるための石垣造りの舟蔵が完成しており、さらに 1 カ所が完成間近であった。このほかに何カ所も築造するとみえ、地面を平らにならした場所のうち、これまで舟蔵が完成した分を加えて、幅 80 間の土地を整地し、その上に舟蔵を組み立てている様子が見えた。舟蔵を組み立てた部分については、幅 30 間程に見えた【註7】。／一、この地からほど近い海の方に東西・南北それぞれ1町(約 118m)ほどの、「高島」という小山の島があったが、それを、水主(船手の構成員のうち、船頭・楫取を除く一般の船乗り)や鉄砲足軽の、合わせて 500 人～600 人程で、4～5 日かけて平らにならす作業を行ったそうである。私がこの目で確認したときも、100 人ほどで地ならしをしていて、海は埋め立て工事が進行中で、その面積を広げつつあった。「何ができるのか」と尋ねたところ、「さっぱり分からない」と答える者もいたが、大工に尋ねると、「塩田になるようだ」という答えが返ってきた。

同じ記事のなかで「鉄砲之者式百御座候由」とあるので、鉄砲足軽が 200 人、水主が 300 人～400 人ということになるうか。

埋め立てによって造成された土地(図Ⅳ-2、図 V-4)は、新たに町立てされて「新町」と名付けられた(宮本 2013,10-8 頁)。「島原大概様子書」によると新町に該当する町々は地子免許となっているが(林 1954c,317 頁)、「地子免許という特権が、城下町建設の草創期に町立てされた町にのみ適用される」という前提に立つならば、埋め立ては島原城の城下町整備と一体の事業であったと考えられる。

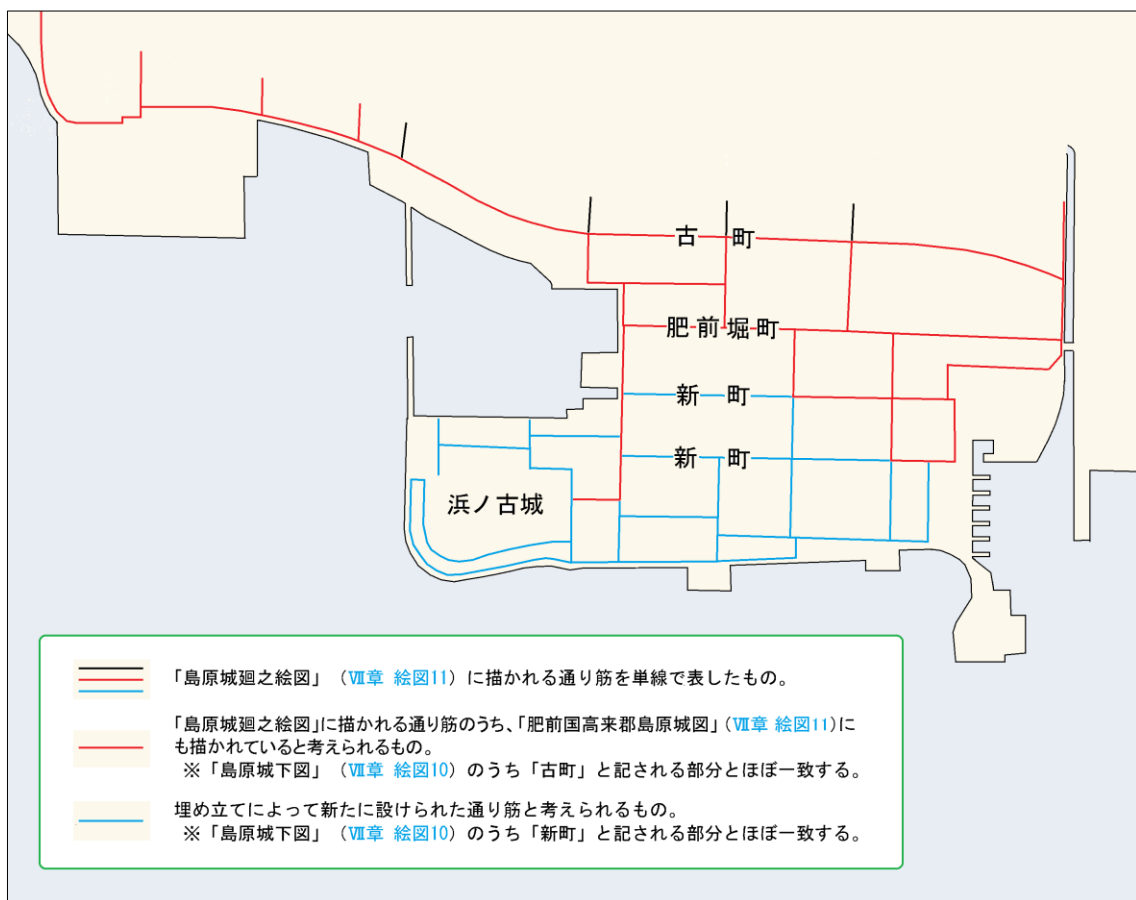
なお、このの新町はいくつかの町名に分かれ、「新町掛」と呼ばれる町組を形成することになる(林 1954c, 514 頁)。



図Ⅳ－1

「肥前国高来郡島原城図」部分 (Ⅶ章 絵図 3)

※左上の赤枠内(筆者加筆)は、本来「薄群青色」で着色すべきか。



図Ⅳ－2 「島原城廻之絵図」部分トレース図 (Ⅶ章 絵図 11)

## 5. 小笠原氏・来島氏預かり時代～高力氏時代【寛永 15(1638)年～寛文 8(1668)年】

島原の乱ののちの寛永 15(1638)年、松倉氏は改易となり、小笠原壱岐守忠知と来島(久留島)丹波守通春が島原城在番を勤める。浜城が依然として、城としての機能を有していたのであれば【註 8】、同じように在番を置いたであろう。そしてその翌年、高力氏が入封する。

正保 2(1645)年の「肥前国高来郡之内高力摂津守領分図」(Ⅶ章 絵図 8)を見ると、浜城は「古城」、すなわち城跡とされ、それまでに城としての機能を停止していたことが分かる。その理由は判然としませんが、以下①～④のような可能性を指摘できよう(表Ⅳ－1 参照)。

- ①寛永期に福岡・人吉で起きたような家臣による立て籠もり事件を未然に防ぐため破却した。
- ②浜城はあくまで島原城完成までの仮の城であり、島原城の完成後その役目を終えた。
- ③島原の乱のような大規模な一揆を想定し、一揆側による利用を未然に防ぐため破却した。
- ④寛永 15 年、西国大名に対して古城の徹底した破却が命じられたとき、その対象となった。

ただし、寛永 4(1627)年までになされた埋め立て工事により、浜城の要害性はいちじるしく損なわれているから(図Ⅴ－4)、①・③の可能性は低いものと思われる。

寛文頃の「肥前国島原之城」(Ⅶ章 絵図 9)には、「古城／東西七十間／南北五十五間／此廻り(このまわり)石垣高サー間余」と記され、堀があったと思われる箇所には、「魚タナ」・「同」とある(図Ⅴ－3のH8－J1ライン辺り)。「櫓は移築・転用されたが石垣は残された。堀は埋め立てられ、魚棚(魚店)となった。」というところだろうか。また、寛文 9(1669)年以降作成の「島原城廻之絵図」(Ⅶ章 絵図 11、図Ⅳ－2)を見ると、小高くなった場所が描かれ、「浜ノ古城」との注記がある。

ところで正保・慶安期、幕府は道帳の提出を諸藩に命じ、その中で古城の概要を報告させているが【註 9】、肥前国道帳に記載された古城 17 カ所に浜古城は含まれていない(武雄市図書館・歴史資料館 2013)。理由は定かではないが、①記載された古城は、元和一國一城令によって破却された城に限定されていた、②記載するに足らない城とみなされていた、③要害としての機能を完全に失っていた、④出丸として認識されていた、などが考えられる。

浜城跡の周辺はその後埋立て・町割りがなされ、寛政 4(1792)年の大変までに海に突出した、矩形に近い一画となる。浜城跡地に新たに付された町名は船津町であり、三軒屋(さんげんや)、魚棚(うをのたな)などの小名が史料に見える(林 1954c, 514 頁; Ⅶ章 絵図 1; Ⅶ章 絵図 2; Ⅶ章 絵図 9)。

| 西暦                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | 和暦      | 事 績                                                                            |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|--------------------------------------------------------------------------------|
| 1614                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 慶長 19 寅 | 7月、有馬直純転封、鍋島藩、浜城を預かり、堀・土手を整備 <sup>※1</sup> 。                                   |
| 1615                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 慶長 20 卯 | 閏6月、一国一城令。                                                                     |
| 1616                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 2 辰  | 6月、松倉重政入封、12月浜城へ移徙 <sup>※1</sup> 。光伝寺造立 <sup>※2</sup> 。                        |
| 1617                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 3 巳  |                                                                                |
| 1618                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 4 午  | 島原城建設予定地にあった森岳大明神を高島に移転 <sup>※5</sup> 、島原城築城開始 <sup>※1</sup> 。                 |
| 1619                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 5 未  |                                                                                |
| 1620                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 6 申  | 配流となった美濃国の「加平治」、この年から浜城にて起居するか <sup>※2</sup> 。                                 |
| 1621                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 7 酉  | 善法寺造立 <sup>※3</sup> 。                                                          |
| 1622                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 8 戌  | この頃まで松倉重政、キリスト教を容認す <sup>※4</sup> 。                                            |
| 1623                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 9 亥  |                                                                                |
| 1624                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 元和 10 子 | 島原城(高来城)完成 <sup>※1</sup> 。松倉重政、浜城から島原城に移る <sup>※6</sup> 。江東寺造立 <sup>※7</sup> 。 |
| 1625                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 2 丑  | 高島にあった鷹島大権現を島原城の東の海岸に移転 <sup>※8</sup> 。                                        |
| 1626                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 3 寅  |                                                                                |
| 1627                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 4 卯  | 3月、幕府隠密報告書、浜城・埋立工事について記す。付図に、埋立工事がほぼ終わった様子を描く <sup>※9</sup> 。                  |
| 1628                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 5 辰  |                                                                                |
| 1629                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 6 巳  |                                                                                |
| 1630                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 7 午  | 11月、松倉重政死去、松倉勝家が島原藩主となる。                                                       |
| 1631                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 8 未  |                                                                                |
| 1632                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 9 申  | 6月、福岡藩で家臣による立て籠もり事件勃発(黒田騒動) <sup>※10</sup> 。                                   |
| 1633                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 10 酉 |                                                                                |
| 1634                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 11 戌 | 晴雲寺造立 <sup>※3</sup> 。この年か、島原藩で家中騒動 <sup>※10 ※11</sup> 。                        |
| 1635                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 12 亥 |                                                                                |
| 1636                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 13 子 | 8月頃、島原藩の若い家臣が数多く逃亡 <sup>※10</sup> 。                                            |
| 1637                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 14 丑 | 10月、島原の乱勃発、島原城5日間包囲さる <sup>※12</sup> 、また記録に、海辺の「古城」の記載あり <sup>※13</sup> 。      |
| 1638                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 15 寅 | 2月、島原の乱終結。4月、松倉勝家改易。西国大名に対して古城の徹底した破却が命じられる <sup>※14</sup> 。                   |
| 1639                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 16 卯 | 4月、高力忠房入封。                                                                     |
| 1640                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 17 辰 | 7月、人吉藩で家臣による立て籠もり事件勃発(お下の乱) <sup>※10</sup> 。                                   |
| 1641                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 18 巳 |                                                                                |
| 1642                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 19 午 |                                                                                |
| 1643                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 20 未 |                                                                                |
| 1644                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 寛永 21 申 |                                                                                |
| 1645                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 正保 2 酉  | 12月、島原藩領絵図の浜城部分に「古城」と記載される <sup>※15</sup> 。                                    |
| 1646                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 正保 3 戌  |                                                                                |
| 1647                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 正保 4 亥  |                                                                                |
| 1648                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 正保 5 子  |                                                                                |
| 1649                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 慶安 2 丑  | 8月、肥前国道帳成る。古城書上げに浜城なし <sup>※16</sup> 。                                         |
| <div> <div> ※1 … 国書刊行会1970,591頁。<br/> ※2 … 島原市仏教会1992,607頁。<br/> ※3 … 島原郷土史会1980,42,43頁。<br/> ※4 … 神田2005,96頁。<br/> ※5 … 島原市教育委員会1998,5頁。<br/> ※6 … VII章 絵図3。<br/> ※7 … 島原市ホームページ(<a href="http://www.city.shimabara.lg.jp/page939.html">http://www.city.shimabara.lg.jp/page939.html</a>)<br/> 2017年5月20日閲覧。 </div> <div> ※8 … 島原市教育委員会1998,5頁。<br/> ※9 … VII章 絵図7。<br/> ※10 … 福田2005,133,143,148,150頁。<br/> ※11 … 白峰2009,41頁。<br/> ※12 … 林1954b,73頁。<br/> ※13 … 鶴田1994,51頁。<br/> ※14 … 白峰2003,226頁。<br/> ※15 … VII章 絵図8。<br/> ※16 … 武雄市図書館・歴史資料館2013。 </div> </div> |         |                                                                                |

表Ⅳ－1 浜城関連年表

## V. 埋没した島原城下町の復元

### 1. 作成されなかった実測図

島原城下絵図は、かなりの数が残存し、『島原鉄砲町 島原市鉄砲町伝統的建造物群保存対策調査報告書』（島原市教育委員会 2009）や『歴史地理学会』第 43 巻 1 号（歴史地理学会 2001）に収録されている。しかしながらそれらの資料に、「島原大變以前の実測図」は 1 点も見当たらない。

矢守一彦氏は次のように言う。「城下の測量は諸藩にとっても大事業であったから、一度成った実測図は時代をこえてトレースされ、あるいは縮尺だけをかえ、これに部分的補訂を加えて幾度か用いられたのである。ことに気苦労の多い幕用図（引用者註：幕府提出用の絵図）においては、たとえば米沢藩では、ある期間中、享保 7 年図をその〈モデル〉としたという具合だった。」（藤岡 1983, 38 頁）。

仮に島原大變以前に実測図が作成されていたとすれば、矢守氏がいうように、その系統図が見いだされようものだが、それが 1 点も見いだせないばかりでなく、島原大變の状況を幕府に報告した際の絵図「島原大變大絵図」・「寛政四年大震図」も実測図ではなかった（島原市仏教会 1992, 124 頁）。このことから島原大變以前、実測図は 1 点も作成されなかったと判断できよう。

### 2. 島原城下通り筋の埋没状況

「寛政四年島原地変記」は島原大變後の被害の様子を次のように描写する（地学会 1892, 227 頁）。

「大手以南は土砂積で数尺以上丈余に至り無数の丘陵高低相望み数十の池沼水光相映す（略）新町掛古町掛は家屋悉く流亡し土砂埋りて道路宅地の区別なきに至れり（略）堀町の或る家にて井戸を穿ちしに四尺計にして一面に石灰を以て塗りし所あり蓋し大變前宅地の地盤なりしなるへし」

——城の正面より南は、土砂が堆積し、数尺から 1 丈以上におよんでいる。数多くの丘陵から高い場所も低い場所も望め、数十ヶ所の池の水面は陽の光を映して輝いている。（略）新町掛・古町掛は家屋がことごとく押し流され、土砂が埋って道路と宅地が区別できないまでになっている。（略）堀町のとある家で井戸を掘ったところ、四尺（約 121cm）ほどで一面に石灰を塗った地面に行き当たった。まさしく島原大變前の宅地の地面なのであろう。

しかしながら、一様に数尺以上の土砂の堆積があったとは考えにくい。当然ながらその度合いは漸減漸増であり、数寸から 1 尺程度のところもあったはずである。

島原大變前後の地理的環境の変化を、貼り紙によって表した絵図が複数知られているが、それを見ても大手川（なる川）から南へ数百メートルあたりまでは大變以前の通り筋が比較的良好に残されていたことが分かる。また、「御城下量地三分拾間之図」（Ⅶ章 絵図 12）は復興直後まもなく作成されたと思われる絵図であるが、それによると、大手前にかかる橋（図 V-1 の右端）のあたり、すなわち現在のアーケード北側入口付近はいち早く復興されており、埋没の度合いが少なかったと考えられる。

### 3. 島原大変以前における島原城下通り筋の復元

土砂埋没の度合いが少ない大手前付近（前項参照）のうち3カ所について、「島原大変前の島原地図」（Ⅶ章 絵図 1）に記された間数を現在の実測図上に辿ってみると、①その間数が正確なものであること、②1間を 6.5 尺としていたこと、の2点が判明した（Ⅶ章 絵図 1 で詳述）。つまり、同図によって町割りの復元が可能となるわけである。本節ではその復元の過程を説明する。なお、下の枠内に示した図版をご参照いただきたい。

1) 基礎資料とした「島原大変前の島原地図」およびその間数 ⇒ 図 V-1・図 V-2

2) 間数のメートル法換算 ⇒ 表 V-1

3) アルファベット・数字からなる記号 ⇒ 図 V-3

#### 1) 南北筋A・B・C・D・E・H・Kの復元

##### ①南北筋E

V章第1節から本節まで述べたように、E2-E3は島原大変前の道筋を残していることが明らかである（Ⅶ章 絵図 1 を参照）。そこで、（ごくわずかな湾曲が見られるものの）その延長線上にあるE3-E6もまた、当時の道筋を残していると考えられる。『島原市街図』（Ⅶ章）に見えるE6以南の道は、近世の絵図には見られない。そこで、E5-E6の延長線上に、E3からの距離が 161.5 間となるようE7を設定する。

##### ②南北筋D

D2-D6が 113 間、E7-D6が 36 間となるように、D6を設定、D2と直線で結ぶ。なお、『島原市街図』（Ⅶ章）に見られるD2-X1-X2-X3-X4-X5の通り筋は、島原大変後に新設された、南南東方向に伸びる街道の一部である（Ⅶ章 絵図 12）。

##### ③南北筋A

『島原市街図』（Ⅶ章）に見えるA1-A4は島原大変以前の通り筋を継承したものである、との仮説をたて、A1から 104 間の地点にA3を設ける。次に、D2-D6ライン上に、A3-D3間が 35 間となるように、D3を設定、A3と直線で結ぶ。こうして地図上に引いたA3-D3ラインは、後述するA2-M1ラインとほぼ並行であり、A1-A4が大変以前の通り筋を継承した蓋然性が高いこと、また南北筋E・南北筋Dに関する通り筋の復元との整合性が高いことを示している。

##### ④南北筋B

D6から北方向へ 43 間の地点にD5を設定する。43 間という数値は、B1-B2ラインの間数から推定したものである。次にD5から、D6-E7ラインに並行であり、かつA4-D5が 44 間となるよう、A4を設定する。A4は現在の通り筋上にあり、Aラインについては現在の通り筋が島原大変以前から継承さ

れた蓋然性が極めて高いことを示している。次に、**A4－D5**ライン上に、**A4－B1**：**B1－D5**＝4：5となるよう、**B1**を設定する。この比率はⅦ章 絵図1から導き出したものである。**B1**から南方向へ線を引き、**B2**を設定する。

#### ⑤南北筋C

**B2－D6**ライン上に、**B2－C1**：**C1－D6**＝3：7となるよう、**C1**を設定する。この比率はⅦ章 絵図1から導き出したものである。さらに、**C1**から南方向へ 18 間の地点に**C2**を設定する。

#### ⑥南北筋H

**H5**から 117.5 間の地点に**H8**を設定する。その結果、**D6・E7・H8**が一直線上に並ぶ。このことは、**A2－M1**ライン、および**H4－H5－H8**ラインが島原大変以前の通り筋を継承したものである蓋然性が極めて高いことを示している。

#### ⑦南北筋K

**E7－H8**：**H8－K3**＝1：1となるよう、**K3**を設定する。さらに**K3**を通り、かつ**H5－H8**と並行である南北筋**K**を求める。これは、「近世初期の両側町においては町屋の奥行の長さを統一する傾向がみられる」ことによる推定である。

#### ⑧南北筋K2－K3

**K3**から北方向へ 54 間の地点に**K2**を設定する。すると、**K2**は現在の通り筋上にあることになる。しかしこの 54 間という間数は、**K1**（後述）から**K3**までの間数である。しかも**H7－K2**ラインは島原大変後の絵図（Ⅶ章 絵図 12）に見当たらない。ここでは、54 という数値が誤記または誤写であり、現在の通り筋である**H7－K2**ラインと重なるのも偶然である可能性を指摘しておきたい。

## 2) 東西筋E7－N2、H7－M3、D4－M2、A2－M1の復元

#### ⑨東西筋E7－N2

**E7－H8**のライン上に、**E7－G1**：**G1－H8**＝3：1となるよう、**G1**を設定する。この比率はⅦ章 絵図1から導き出したものである。次に、**G1**から東へ 62 間の地点に**N2**を設定する。

#### ⑩東西筋H7－M3

**H7**から東方向へ 34 間の地点に**M3**を設定する。⑧南北筋**K2－K3**の項でも述べたが、**H7－M3**は島原大変後の道り筋と考えられ、ゆえに**H7－M3**は推定の度合いが高いラインである。

#### ⑪東西筋D4－M2

**A2－M1**ラインと並行になるように、かつ、長さが 96 間となるように**D4－M2**ラインを設定する。**A2－M1**ラインと並行としたのは、近世初頭の多くの町割りに見られる特徴による推定であるが、このラインは後述する**M2－M6**ラインとも矛盾しない。

#### ⑫東西筋A2－M1

**A2**から東方向へ 120.5 間の地点に**M1**を設定する。⑥南北筋**H**の項で述べたように、**A2－M1**のラインは島原大変以前の通り筋を継承したものである蓋然性が極めて高いラインである。

### 3) 海辺の片町の復元

---

#### ⑬南北筋M1－M3

M1とM3を直線で結ぶ。M1・M2・M3が一直線に並ぶのは偶然ではないかも知れない。

#### ⑭海辺の片町

M2－M6が105間となるように、M2－M6－N3－N1の街区を設定する。

### 4) 船津町(図V－3の左下部分)の復元

---

#### ①南北筋G

G1から南方向に71間の地点にG5を設定する。

#### ②南北筋J

G1－N2のライン上に、G1－J1:J1－N2=3:4となるよう、J1を設定する。この比率はⅦ章 絵図1から導き出したものである。このJ1から南方向へ33間の地点にJ3を、J3から南方向へ20間の地点にJ4を設定する。また、J3から北方向へ28-20=8間の地点にJ2を設定する。

#### ③東西筋G2－M7

J3を通り、J1－J4のラインと垂直に交わる線を引く。その線と南北筋Gが交わる点にG2を設定、G2から東方向へ65間の地点にM7を設定する。

#### ④南北筋G・I・L

G2－M7のライン上に、G2－I1:I1－J3:J3－L2:L2－M7=12:18:12:17となるよう、I1およびL2を設定する。この比率はⅦ章 絵図1から導き出したものである。次に、G2・I1・L2から南方向に20間の地点にそれぞれ、G3・I2・L3を設定する。さらに、L2から北方向に28-20=8間の地点にL1を設定する。

#### ⑤東西筋G4－M8

G3－G5のライン上に、G3－G4:G4－G5=7:3となるよう、G4を設定する。この比率はⅦ章 絵図1から導き出したものである。次に、G4から東方向へ62間の地点にM8を設定する。

#### ⑥東西筋G5－M9

G5から東方向へ、G4－M8ラインと並行になるように、G5－M9のラインを引く。そのとき、M7－M8－M9が一直線に並ぶようにする。

### 5) 海岸線の復元

---

#### ①水頭湊(X2・X3辺りを中心とする湊)の東岸ライン基準線

E7－G1のライン上に、E7－F1:F1－G1=7:5となるよう、F1を設定する。この比率はⅦ章 絵図1から導き出したものである。次に、そのF1から南方向に直線を引く。これにより水頭湊東岸ラインを推

定し、青色のラインで図示した。

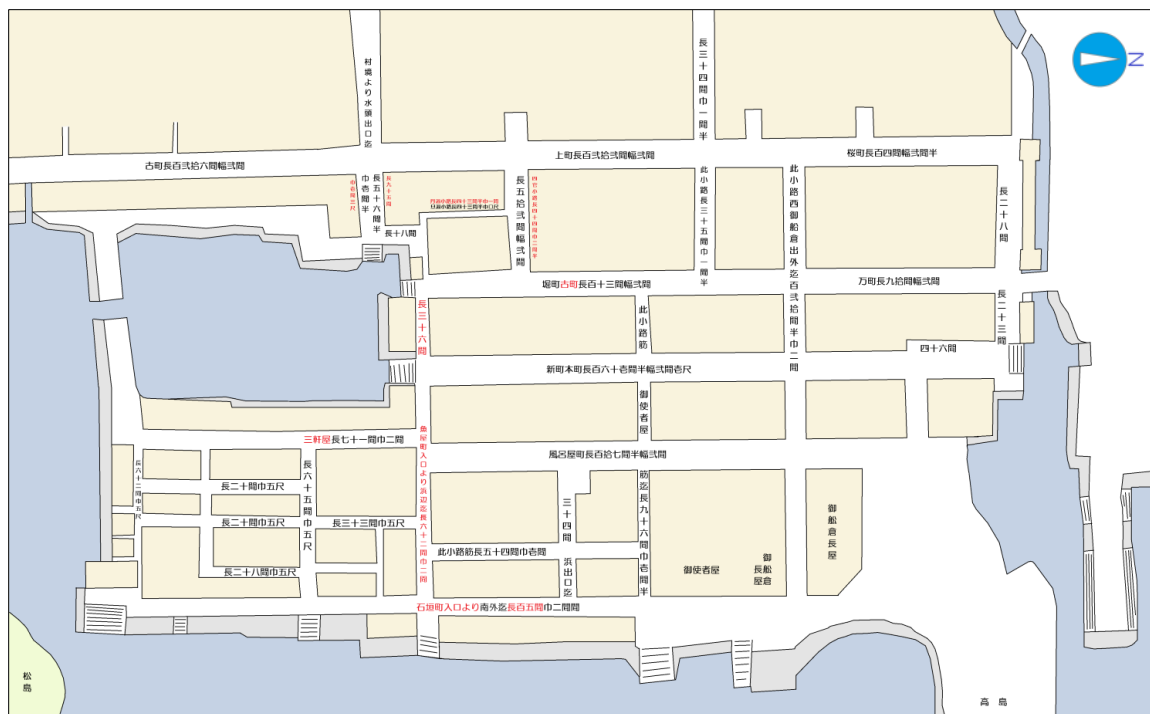
### ②大手川(なる川)の河口付近

H1～H4、O1～O6、O7～O12、P1～P5の海岸線は、推定の根拠がなかったので、島原大變後の実測図(Ⅶ章 絵図 12)および、明治時代の字図に残る筆界から推定し、青色のラインで図示した。O7とO8の間の復元については、図V-3の範囲から除外したが、図V-4に反映させている。

### ③その他

その他の箇所についても海岸線を推定し、青色のラインで示した。ただし、通り筋に沿う海岸線以外については推定の度合いが高い。

以上通り筋の復元を行ったが、その結果、いくつかの事実が明らかとなった。すなわち、1)通り筋は、島原大變後もかなりの程度残されており、眉山の崩壊による城下町埋没というよりむしろ、その後の津波による町屋流失の被害が大きかったと考えられること、2)B2-N2ラインがほぼ緯線と並行であり、この通り筋ラインが方位磁石ではなく、測天によって定められた可能性があること、3)町屋は、奥行き15間を基準とした両側町であったこと、などである。



図V-1 「島原大變前の島原地図」部分トレース図（Ⅶ章 絵図1）

赤色の文字は、「島原城下町大變前の図」（Ⅶ章 絵図2）によるもの。

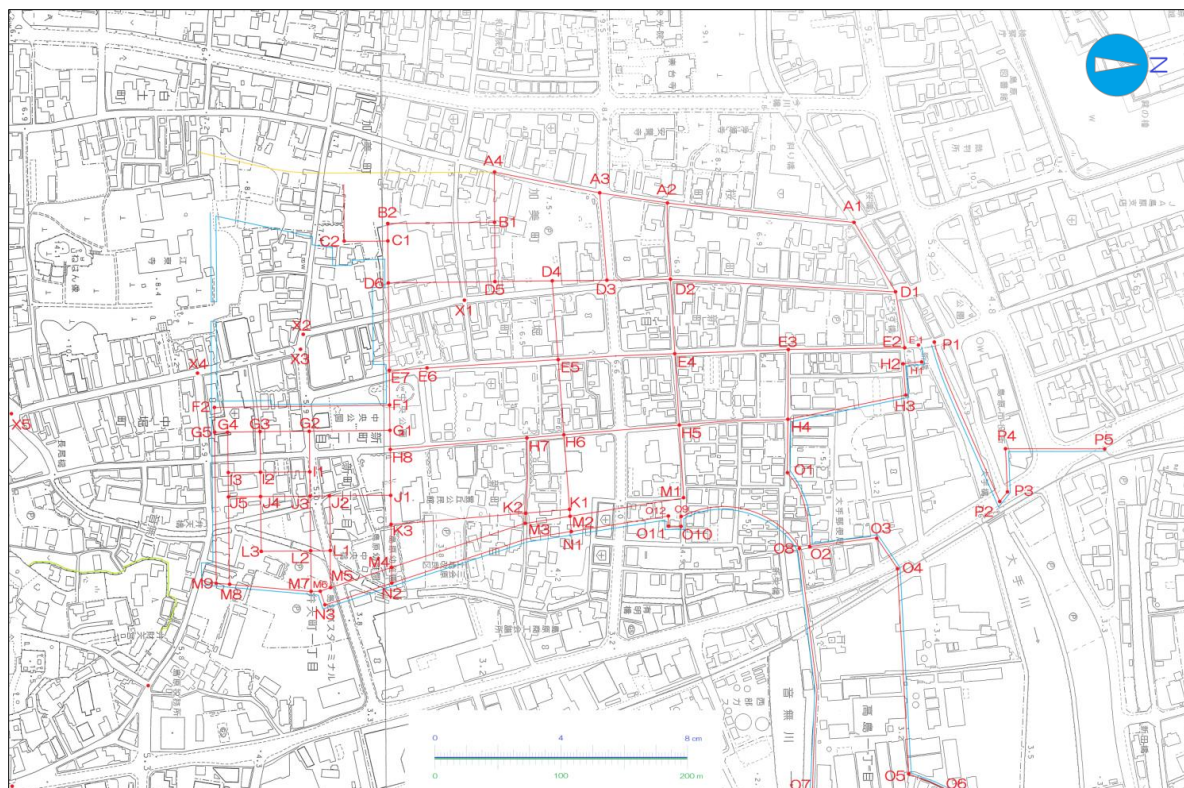


図V-2 「島原大變前の島原地図」部分トレース図（Ⅶ章 絵図1）

図V-1の間数を算用数字で表したもの。

| (a)                                      | (b)           | (c)    | (d)         | (e)        | (f)             |
|------------------------------------------|---------------|--------|-------------|------------|-----------------|
| 「島原大変前の島原地図」および異本「島原城下町大変前の図」に記された通り筋の長さ | 曲尺のメートル換算(暫定) | 間竿の長さ  | (a)のメートル換算  | 「島原市街図」の縮尺 | (a)の「島原市街図」上の長さ |
| (単位:間)                                   | (単位:m)        | (単位:尺) | (単位:m)      |            | (単位:cm)         |
|                                          |               |        | (a)x(b)x(c) |            | (d)x(e)         |
| 8                                        | 0.30303       | 6.5    | 15.75756    | 1/2500     | 0.6303024       |
| 18                                       | 0.30303       | 6.5    | 35.45451    | 1/2500     | 1.4181804       |
| 20                                       | 0.30303       | 6.5    | 39.39390    | 1/2500     | 1.5757560       |
| 23                                       | 0.30303       | 6.0    | 41.81814    | 1/2500     | 1.6727256       |
| 23                                       | 0.30303       | 6.3    | 43.90905    | 1/2500     | 1.7563619       |
| 23                                       | 0.30303       | 6.5    | 45.30299    | 1/2500     | 1.8121194       |
| 25                                       | 0.30303       | 6.5    | 49.24238    | 1/2500     | 1.9696950       |
| 28                                       | 0.30303       | 6.5    | 55.15146    | 1/2500     | 2.2060584       |
| 33                                       | 0.30303       | 6.5    | 64.99994    | 1/2500     | 2.5999974       |
| 34                                       | 0.30303       | 6.5    | 66.96963    | 1/2500     | 2.6787852       |
| 35                                       | 0.30303       | 6.5    | 68.93933    | 1/2500     | 2.7575730       |
| 36                                       | 0.30303       | 6.5    | 70.90902    | 1/2500     | 2.8363608       |
| 43                                       | 0.30303       | 6.5    | 84.69689    | 1/2500     | 3.3878754       |
| 44                                       | 0.30303       | 6.5    | 86.66658    | 1/2500     | 3.4666632       |
| 46                                       | 0.30303       | 6.0    | 83.63628    | 1/2500     | 3.3454512       |
| 46                                       | 0.30303       | 6.3    | 87.81809    | 1/2500     | 3.5127238       |
| 46                                       | 0.30303       | 6.5    | 90.60597    | 1/2500     | 3.6242388       |
| 54                                       | 0.30303       | 6.5    | 106.36353   | 1/2500     | 4.2545412       |
| 55                                       | 0.30303       | 6.5    | 108.33323   | 1/2500     | 4.3333290       |
| 62                                       | 0.30303       | 6.5    | 122.12109   | 1/2500     | 4.8848436       |
| 65                                       | 0.30303       | 6.5    | 128.03018   | 1/2500     | 5.1212070       |
| 70                                       | 0.30303       | 6.5    | 137.87865   | 1/2500     | 5.5151460       |
| 71                                       | 0.30303       | 6.5    | 139.84835   | 1/2500     | 5.5939338       |
| 90                                       | 0.30303       | 6.0    | 163.63620   | 1/2500     | 6.5454480       |
| 90                                       | 0.30303       | 6.3    | 171.81801   | 1/2500     | 6.8727204       |
| 90                                       | 0.30303       | 6.5    | 177.27255   | 1/2500     | 7.0909020       |
| 96                                       | 0.30303       | 6.5    | 189.09072   | 1/2500     | 7.5636288       |
| 104                                      | 0.30303       | 6.5    | 204.84828   | 1/2500     | 8.1939312       |
| 105                                      | 0.30303       | 6.5    | 206.81798   | 1/2500     | 8.2727190       |
| 113                                      | 0.30303       | 6.5    | 222.57554   | 1/2500     | 8.9030214       |
| 117.5                                    | 0.30303       | 6.5    | 231.43916   | 1/2500     | 9.2575665       |
| 120.5                                    | 0.30303       | 6.5    | 237.34825   | 1/2500     | 9.4939299       |
| 122                                      | 0.30303       | 6.5    | 240.30279   | 1/2500     | 9.6121116       |
| 126                                      | 0.30303       | 6.5    | 248.18157   | 1/2500     | 9.9272628       |
| 161.5                                    | 0.30303       | 6.5    | 318.10574   | 1/2500     | 12.7242297      |

表V-1 間数換算表



図V-3 島原城下町の復元図 赤色のラインは、復元した通り筋、青のラインは海岸線(推定)、黄緑のラインは弁財天宮下の崖線(現在)、オレンジのラインはAラインの延長線(推定)。なお基図は『島原市街図』(Ⅶ章『島原市街図』20・『島原市街図』25)である。 ※巻末に拡大図を掲載。

#### 4. 島原城下町大手川以南の形成過程

中世島原の町場をほぼ継承したと考えられる有馬氏時代の島原について詳しいことは分かっていない。しかしⅣ章で述べたように、新町掛(図V-3のEライン以東)が、松倉氏による海の埋立てとその後の町立てによるものであることはほぼ確実である。そして地名が示唆するように、古町掛(図V-3のA・B・C・Dライン)が松倉氏以前の町割りと考えてよいだろう。

このうちAラインは、中世においては街村状を呈する町場であったと考えられる。Aラインの町場の長さはA1から起算して桜町104間+上町122間+古町126間+白土町318間の計670間(約1,320m)に及ぶが(Ⅶ章 絵図1、図V-4)、寛永4(1627)年当時は、この長大な町場の中央付近に舟入があり、「商船」が行き交っていた(Ⅶ章 絵図7)。舟入のすぐ近くのBラインは「旦過小路」(Ⅶ章 絵図1)であり、旅僧の宿泊施設があった可能性がある。CラインのC2は「水頭出口」とされるが(Ⅶ章 絵図1)、寛永14(1637)年頃、水頭には「絵下の寺」があったという(林1954b,183頁)。「絵下」とは「会下」、すなわち「禅宗や浄土宗などで師のもとにあって教えを受けている僧。会下僧。また、その教えを受ける所。」(『日本国語大辞典』)と解釈することもできる(根井1983,76頁)。またこれとは別に、寛永14

(1637)年頃、島原城から20町=1200間≒2364mほど離れた場所(A1から670間南に下った町場の南端よりさらに南あたりか)を「急げ」という地名で呼んでいたが(鶴田 1994,69 頁)、ここにも会下寺があったかもしれない。寛文頃の絵図を見ると、江東寺辺りを流れる川が「急げの川」と呼ばれており(Ⅶ章 絵図 10)、これも会下寺に由来する可能性がある(根井 2017,14 頁)。

松倉氏は島原城建設予定地にあった森岳大明神を、元和4(1618)年に高島に移転して鷹島大権現とし、寛永2年これを再び城の東の海岸へ移転している(Ⅳ章4節、図V-4)。このことから元和4(1618)年の時点では、高島を切り崩して周辺を埋め立てる(Ⅳ章4節)計画はなかったものと思われる。恐らくは大手川(なる川)の南の町場はほぼそのまま残すつもりだったのではないかと。そして、川の北側に新城および城下町を建設、外郭の北・西・東は、深田(図V-4)および晴雲寺(寛永11年)・五社・鷹島大権現(寛永4年)をもって要害とし、城の南は浜城・善法寺(元和7年)・光伝寺(元和2年)・桜井寺(慶長15年)・江東寺(寛永2年)を砦とすることで南方の守りとしたのではなかろうか。【註6】五社・鷹島大権現は小規模ながら海上の砦としての役割を果たし、街道の押えでもある(図V-4)。また善法寺・光伝寺は、いずれも背後に丘陵をひかえ、要害としての機能を備えた寺であった【註6】。

ところで、古い町名としてDライン上の「肥前堀町」が知られるが(Ⅶ章 絵図 10、図V-4)、具体的にどの辺りに堀があったのか明らかではない。確実に言えるのは、堀が松倉氏の入封よりも前に、鍋島氏によって築かれたという伝承があったということだけである(Ⅳ章参照)。そしてその堀についても寛永4(1627)年までには埋め立てられたと見え、同年の「筑前筑後肥前肥後探索書」(Ⅶ章 絵図 7)では、「肥前堀」について一切ふれていない。



図V-4 寛永初年ごろの島原(推定)

## VI. 浜城の位置と構造

### 1. 浜城の位置

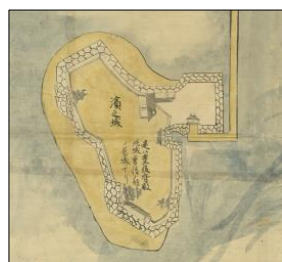
浜城の位置や規模を知る資料は主に以下の3点が存在する。

- ①「肥前国高来郡島原城図」(Ⅶ章 絵図 3、図Ⅵ-1、図Ⅵ-1)
- ②「筑前筑後肥前肥後探索書」(Ⅶ章 絵図 7)
- ③「肥前国島原之城」(Ⅶ章 絵図 9)

これら3点の史料はいずれも、一瞥したところ信頼するに足らぬ印象を受ける。①はデフォルメが著しく、②に描写される浜城の規模(東西 55 間・南北 25 間)と、③に描写される浜城の規模(東西 70 間・南北 55 間)が大きく異なるからである。しかし、3つの史料に論理的整合性を見出せないかといえそうではない。①のデフォルメの理由は明らかに、絵図が図示する約 1km×約 3km という長大な範囲を、短辺:長辺がおよそ 3:4 という絵図本紙に収めるためである。事実、城郭部分(島原城本丸・二ノ丸)の地理的精度は高い。そして城郭部分の地理的精度が高いという点から、浜城の部分についても地理的精度が高いという類推が可能であり、その視点に立って②・③の数値を見ると3点の史料に論理的整合性を見出すことができる。

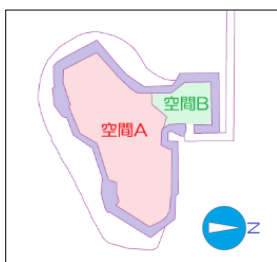
まず、③に記される城の規模は、東西 70 間・南北 55 間であり、その商は  $70 \div 55 \div 1.27$  となる。「肥前国高来郡島原城図」の、城が立地する島までを含めた規模は、図Ⅵ-4 の青枠のようになり、長辺÷短辺の値は 1.20 で、1.27 の近似値となる。

つぎに、②に記される城の規模は、東西 55 間・南北 25 間であり、その商は  $55 \div 25 = 2.20$  である。①の空間A(図Ⅵ-2 の桜色部分)を内包する矩形を描いてみると、長辺÷短辺の値は、石垣上部(図Ⅵ-3 の緑枠)・石垣下部(図Ⅵ-3 の赤枠)ともに約 2.10 であり、2.20 の近似値を得ることができる。この場合、空間B(図Ⅵ-2 の薄緑色部分)を無視したことになるが、②では曲輪の規模を東西・南北間数により単純化して書き表すという特徴があり(Ⅶ章 絵図 6・7 参照)、空間Bを空間Aに付属したものと捉えたのであれば、空間Bを無視したとしてもそれは不自然ではない。



図Ⅵ-1

「肥前国高来郡島原城図」 浜城 空間分類図  
浜城部分(Ⅶ章 絵図 3)

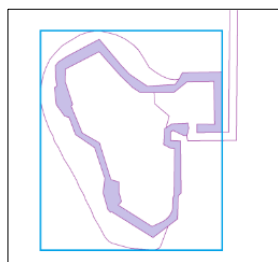


図Ⅵ-2



図Ⅵ-3

浜城 間数比考証図1



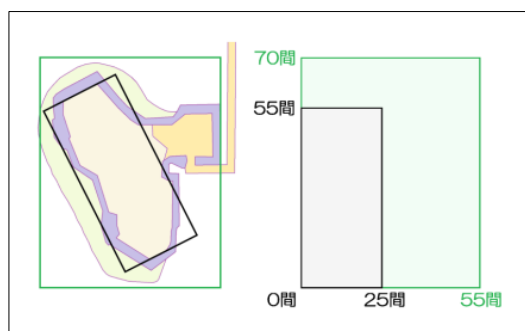
図Ⅵ-4

浜城 間数比考証図2

また、南北軸・東西軸以外の斜角を全て、南北軸・東西軸のラインに置きかえるのは、②の特徴の一つであり(Ⅶ章 絵図 6・7 で詳述)、すなわち 45 度程度までの偏差があるものと考えなければならない。図Ⅵ-3 で示した空間Aを内包する矩形と、東西軸・南北軸によって構成される矩形との偏差は約 27 度であり、許容範囲であるといえる。

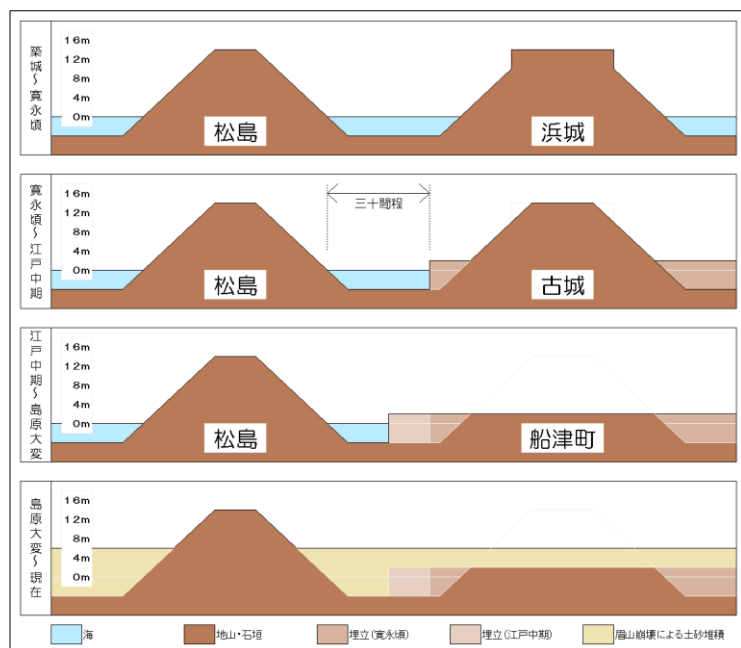
ここで、②・③の2つの史料がほぼ矛盾を生じないように①の縮率を割り出してみると、図Ⅵ-5 のようになる。そしてこれを、城と陸地を結ぶ通り筋が、J1-J5のライン・B2-J1のラインと重なるように、Ⅴ章で復元した通り筋に当てはめると図Ⅵ-6 のように海に突出した部分(G・I・J・Lの各ラインを含む部分)に収まる形になり、①・②・③の記述・描写内容に論理的整合性を見出すことができる。

ところで、復元した浜城から弁財天宮下の崖線(図Ⅵ-6 黄色の線)までの距離は約 90m $\div$ 46 間である。この幅は後の埋め立てによって若干狭まっているが、狭まった後の幅については「松島迄干潟三十間程」と絵図に記されており(Ⅶ章 絵図 11)、これについても矛盾がないことになる(図Ⅵ-7)。



図Ⅵ-5 「肥前国高来郡島原城図」縮率  
推定図(Ⅶ章絵図 3)

図Ⅵ-6 浜城 位置同定図



図Ⅵ-7  
松島・浜城横断概念図

## 2. 浜城の構造

「肥前国高来郡島原城図」(Ⅶ章 絵図 3)と「筑前筑後肥前肥後探索書」(Ⅶ章 絵図 7)とを比較すると、多くの共通点が見いだせる。それは、①「肥前国高来郡島原城図」に描かれる構造物1～8のうち(図Ⅵ-8)、1～7までがよく対応すること(図Ⅵ-9)、②空間Aと空間Bから成ること(図Ⅵ-2、図Ⅵ-10)、③方位が一致すること、などである。「筑前筑後肥前肥後探索書」本文は次のように記す。

「石垣高さ二間程南の方堀二重の矢倉式つ南東の角二三重の矢倉有東二二重の矢倉壱つ只の矢倉壱つ北二矢倉壱つ多門有口北二門矢倉有以上矢倉八つ門矢倉多門共二」

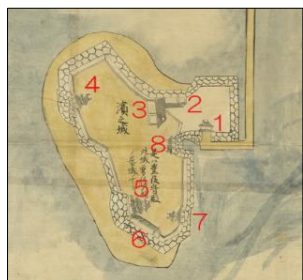
——石垣の高さは2間程。南の方に堀があり、二重櫓が2基(a)(b)ある。南東の角に三重櫓(c)がある。東に二重櫓が1基(d)、只の櫓(平櫓か)が1基(e)ある。北に櫓(平櫓か)が1基(f)、それに多門櫓(g)がある。虎口は北に門櫓がある(h)。以上、櫓の数は門櫓・多門櫓を含めて8基である。

付図との対応が不明確なものもあるが、櫓の総数は「八つ」としているの、櫓ごとにアルファベットを付すと、(a)～(h)の8基と考えてよいのではないか。そして、「肥前国高来郡島原城図」に描かれる櫓も同じ8基である。さらに、「筑前筑後肥前肥後探索書」では3層櫓が1基、2層櫓が3基、単層櫓が3基、門櫓が1基と読めるが、「肥前国高来郡島原城図」もこれとほぼ同じで、3層櫓が1基、2層櫓が2基、単層櫓が4基、門櫓が1基であり、ほぼ一致するといえる。

ところで、「諸国当城之図」のうち「島原城絵図」(新人物往来社 1995,190 頁)には、浜城らしき城郭が描かれているが(図Ⅵ-11)、これと「肥前国高来郡島原城図」(図Ⅵ-1)とを見くらべると、虎口の位置が異なっていることが分かる。これは改修を受けたためかもしれない。

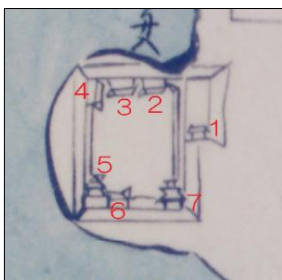
次に石垣の高さについては、「筑前筑後肥前肥後探索書」本文で「二間」(約4メートル)とあり、「肥前国島原之城」では「一間半」(約3メートル)としている。実際、これに近い値だったのであろう。あるいは「肥前国島原之城」では城の西に波戸が加わっているの、石垣の一部が波戸の資材として使われた結果、石垣が低くなったのかも知れない。

空間Aと空間Bの関係がどのようなものであったか明らかではないが、1)空間Bは空間Aに付設する外柵形、2)空間Bは空間Aの虎口を守る馬出、3)空間Aと空間Bはまったく同じ曲輪であるが、何らかの境界装置によって画されていたものの、の3つの可能性を指摘しておきたい。



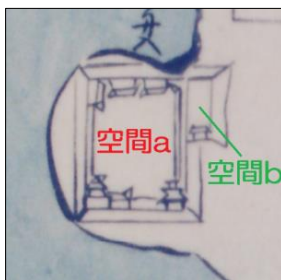
図Ⅵ-8

「肥前国高来郡島原城図」  
浜城部分 (Ⅶ章 絵図 3)  
※佐賀県立図書館蔵



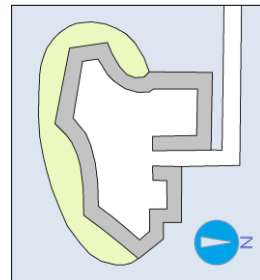
図Ⅵ-9

「筑前筑後肥前肥後探索書」  
浜城部分1 (Ⅶ章 絵図 6)  
※ 長崎歴史文化博物館収  
蔵本「幕府隠密復命書」



図Ⅵ-10

「筑前筑後肥前 肥後探索書」  
浜城部分2 (Ⅶ章絵図 6)  
※ 長崎歴史文化博物館収  
蔵本「幕府隠密復命書」



図Ⅵ-11

「諸国当城之図」のうち「島  
原城絵図」部分トレース図

## Ⅶ. 復元に用いた歴史地理資料

### ■ 絵図 1. 「島原大變前の島原地図」(史料名)(所蔵者不明、法量不明、延宝 7 年～寛政 4 年)

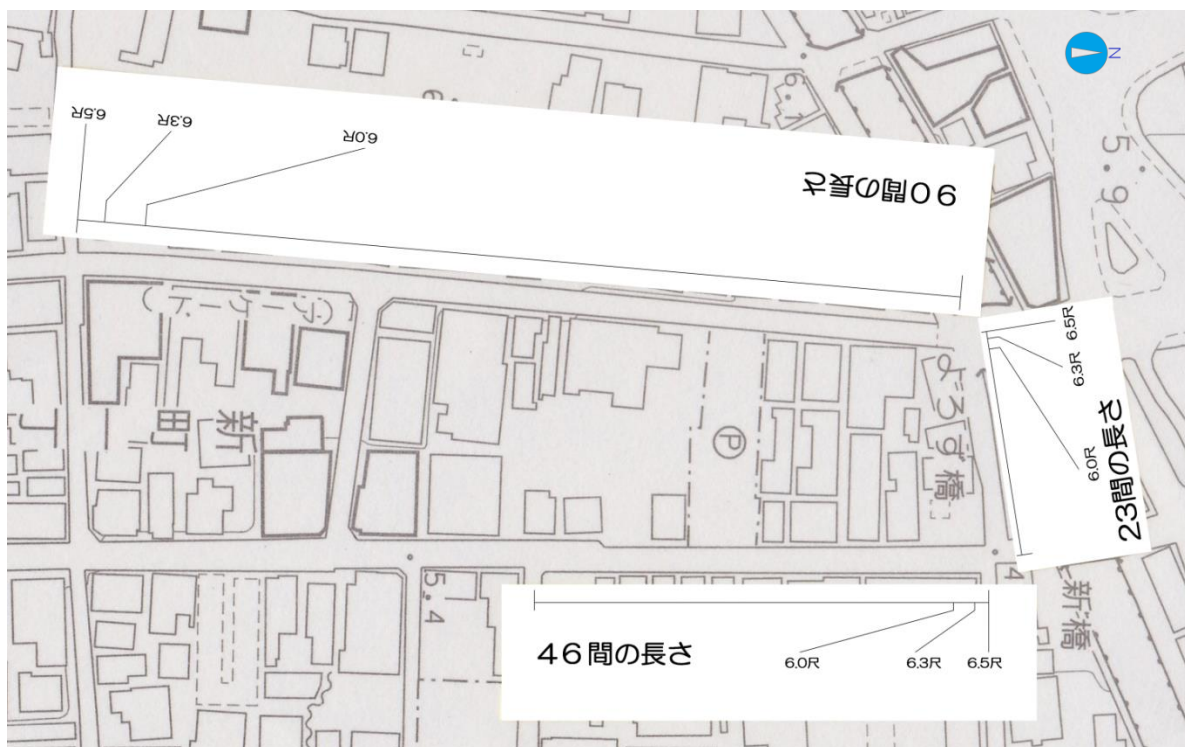
『島原の今と昔』(1990 年刊)の、表紙見返しに写真が掲載された島原城下絵図である(島原市市長公室 1990)。平成 28(2016)年 10 月、島原市社会教育課の宇土靖之氏を通して、同書を企画した島原市市長公室に所蔵者・史料名を問い合わせたところ、いずれも不明とのことであった。しかし、藩の公式文書(絵図)によく見られる特徴を備えていること、刊行物として広く入手可能であり、本稿の記述を検証するのが容易であることから、基礎資料として用いることにした。藩の公式文書によく見られる特徴とはすなわち、1)記された文字が藩の公式文書で用いられた青蓮院流のものであり、字形が整っているのみならず、一文字ずつ筆を起こしていること、2)「御使者屋」「御船倉会所」など、藩の施設に「御」を付すこと、3)描画・彩色が極めて丁寧であり、また色分目録があること、などである。

この絵図に記される主な情報は、町名・通り筋の長さ・幅である。本稿では、この数値をもとに島原大變時に埋没した通り筋の復元を行った。復元にあたり、絵図に記された 1 間の長さを特定する必要があるが、1)埋没の程度が少なく(Ⅶ章 絵図 12)、島原大變以前の町割りが残っていると推定される、2)近現代における道路拡張の影響が比較的少ない、などの条件を満たす 3 箇所を選んで検証を行った結果、「島原大變前の島原地図」に記された間数は正確なものであり、1 間を曲尺 6 尺 5 寸としたものであることが判明した(図Ⅶ-1・図Ⅶ-2)。また、通り筋の長さは表間口間数の総和ではなく、図Ⅶ-3のように計測したことも確認できた。

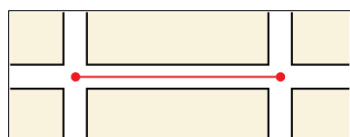
景観年代が寛政 4(1792)年の島原大變以前のものであることは明らかで、絵図にみえる島原町白地官道の石垣は延宝 7(1679)年の築造であることから(林 1954c,1018 頁)、延宝 7 年以降のものと考えられる。この絵図に見られるように新町掛の通り筋ごとに別個の町名が付されるのが寛文期より時代が下った絵図の特徴であること、絵図にみえる「旦過小路」という地名が、のちに音韻が変化して丹官(タンクワン)小路と表記され、そして島原大變によって消滅していることを勘案すると、本図は江戸中期のものとして推定されよう。



図Ⅶ-1 「島原大變前の島原地図」(Ⅶ章 絵図1)



図Ⅶ-2 『島原市街図』(間数を加筆)



図Ⅶ-3 計測法概念図

■絵図 2.「島原城下町大變前の図」(史料名)(島原城天主閣蔵、法量不明、延宝 7 年～寛政 4 年)

前掲「島原大變前の島原地図」の異本である。文字・描画・彩色は丁寧とはいえないが、「島原大變前の島原地図」にない地理情報も含まれる。平成 28 年 10 月現在、島原城天主閣 2 階に常設展示中である。この絵図のほかにも、「島原大變前の島原地図」に近似した絵図は多く、[島原市教育委員会 \(2016\)](#) ほかには写真が掲載されている。

■絵図 3.「肥前国高来郡島原城図」(外題・史料名)(佐賀県立図書館蔵、縦 154cm×横 116cm、寛永 3 年頃)

『佐賀県立図書館蔵 古地図絵図録』(佐賀県史料刊行会、1973 年)にその写真が掲載され、早くから知られた絵図である。同書 74 頁に記される絵図名は「島原城図」、法量は 153×117cm であり、解説文には、「築城間もないころの絵図と思われる。(中略)入海にある浜ノ城は有馬の属城であったが、松倉重政が改造し、海の出城とした。」とある。寛永 2(1625)年移転後の鷹島大権現らしき区画が見え、埋立工事(寛永 4 年 3 月までにはほぼ完成)が未だなされていない様子が見えるので、寛永 3(1626)

年頃の絵図と推定される。

絵図の大部分については、南北軸を東西軸の半分ほどに約めるデフォルメが見られるが、これは、絵図が図示する範囲が南北約 3km×東西約 1km と長大なためであろう。とはいえ、島原城本丸・二ノ丸について言えば、その地理的精度は高い。城郭部分の地理的精度が高いことから、浜城部分についても地理的精度が高いと類推し、浜城復元の基礎資料として用いた。なお本史料は、佐賀県立図書館データベースを通して画像が公開されている。図Ⅳ－1はその画像の一部である。

(<http://www.sagalibdb.jp/ezu/zoomify/go0/go0921/0921.html> 2017 年 6 月 9 日閲覧)。

■絵図 4.「宇和島城下絵図」(史料名)(伊予史談会蔵、縦 167cm×横 213cm、承応 3 年頃)

宇和島城下絵図の中では最も初期のものの一つである。年紀の記載はないが、承応 3(1654)年頃のものであることが明らかにされている(愛媛県歴史文化博物館 2010,99 頁)。また、『伊予の城めぐり—近世城郭の誕生—』に写真が掲載される(愛媛県歴史文化博物館 2010,37 頁)。

■絵図 5.「豊前国小倉城絵図」(外題・史料名)「豊前国小倉／小笠原右近大夫居城」(内題)(国立公文書館蔵、縦 185cm×横 240cm、正保～慶安期)

正保城絵図である。国立公文書館デジタルアーカイブを通して画像が公開されている。

([https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/detail/detailArchives/0305000000\\_8/0000000464/00](https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/detail/detailArchives/0305000000_8/0000000464/00) 2017 年 6 月 9 日閲覧)

■絵図 6.「讃岐伊予土佐阿波探索書」(史料名)(河合広治氏旧蔵、書冊、寛永 4 年)

■絵図 7.「筑前筑後肥前肥後探索書」(史料名)(河合広治氏旧蔵、書冊、寛永 4 年)

「讃岐伊予土佐阿波探索書」および「筑前筑後肥前肥後探索書」(以下、「探索書」とする)はいずれも、幕府隠密によると思われる西国外様大名領国の探索書で、白峰旬氏による詳細な検討があるが(白峰 2006)、ここでは本稿との関連で、探索書付図の特徴の一つについて触れておきたい。

その特徴とは、平面形状における東西軸・南北軸以外の罫線・斜角については、(理念上の)南北軸・東西軸に平行な線・直角に置きかえて表現するというものである。たとえば宇和島城本丸周辺の平面形状は図Ⅶ－4のようであるが、「讃岐伊予土佐阿波探索書」では図Ⅶ－5のように描かれる。また、小倉城本丸周辺の平面形状は図Ⅶ－6のようであるが、「筑前筑後肥前肥後探索書」では図Ⅶ－7のように描かれる。つまり罫線については 45 度程度までの偏差がありうることになる。本文についても同様であり、斜角についての描写は一切ない。

寛永期の日本には角度の観念がなかったか(大矢 1977,168 頁)、少なくとも、角度に関する知識は、多くの人に共有されていた知識ではなかった(鈴木ほか 2009,42 頁)【註10】。したがって、斜角を計測してその結果をもとに絵図を作成することは多くの場合、行われなかったであろうし、斜角は絵図の作成者のみならず、それを見る側にとっても、(現代ほど)意味のある情報ではなかったと考えられる。当時の日本はある意味において、空間の「概念的な構造を位相的に表現する社会」(若林 1995,61 頁)であったと位置づけることが出来よう【註11】。そのような社会にあっては、斜角を直角や直線に置きかえた絵図であっても、「事実」としての値(若林 1995,68 頁)をもち、ゆえに人々に受け入れられた、すなわち、一つのスキーマ(松本ほか 2003,39 頁)を形作っていったと考えられる【註12】。

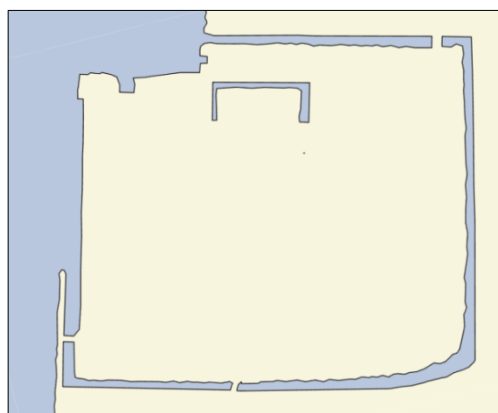
このことは文章で書き表す場合も例外ではない。探索書本文についても斜角について叙述することではなく、例えば曲輪の規模を説明する場合、矩形でない曲輪についても、「東西～間・南北～間」というように、「概念上の矩形」に置きかえて表現していたし、正保期の城目録や道帳【註9】についても、曲輪の規模を表すこのやり方は受け継がれていくのである。

興味深いのは正保城絵図で、たとえば盛岡城の場合、畠紙に地理上の方位が記されるほか(図Ⅶ-8)、概念上の方位によって表現される概念上の矩形が明示されている(図Ⅶ-9の赤枠部分)。「概念上の方位」による矩形は恐らく、籠城人数の算出のために設定されたもの、と考えられる。



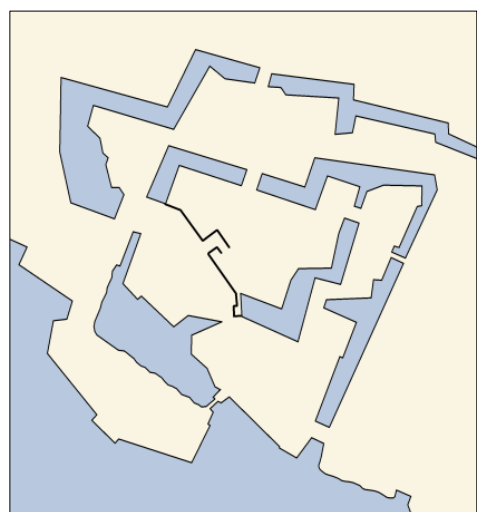
図Ⅶ-4

「宇和島城下絵図」部分トレース図  
(Ⅶ章 絵図 4)



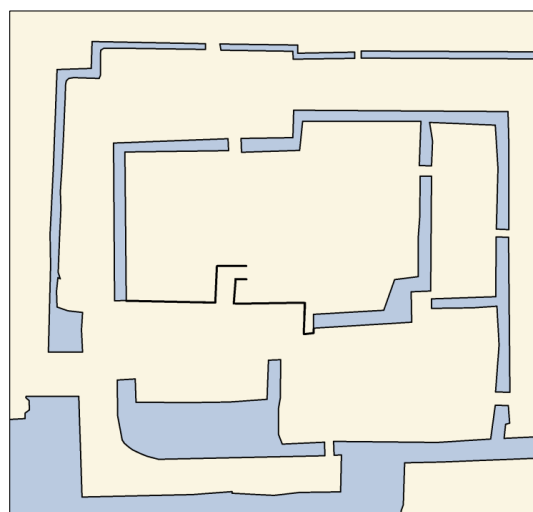
図Ⅶ-5

「讃岐伊予土佐阿波探索書」部分トレース図  
(Ⅶ章 絵図 6)



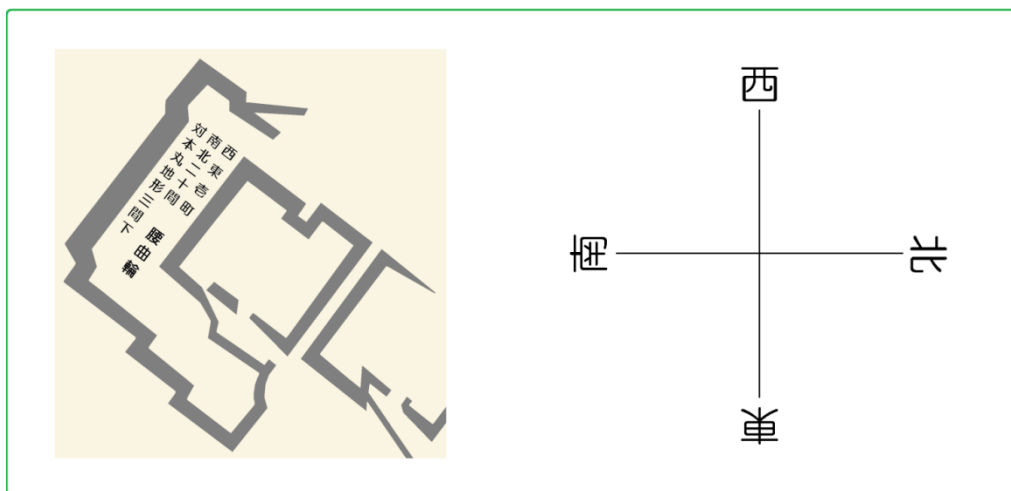
図Ⅶ-6

「豊前国小倉城絵図」部分トレース図  
(Ⅶ章 絵図 5)

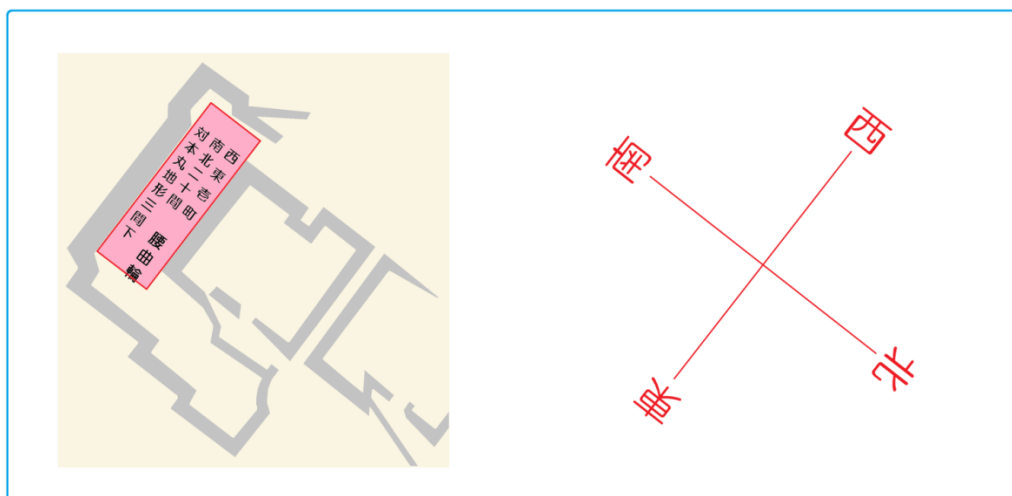


図Ⅶ-7

「筑前筑後肥前肥後探索書」部分トレース図  
(Ⅶ章 絵図 7)



図Ⅶ-8 「奥州之内 南部領盛岡平城絵図」部分トレース図および「地理上の方位」



図Ⅶ-9 「奥州之内 南部領盛岡平城絵図」部分トレース図および「概念上の方位」  
(概念上の方位によって表現される矩形を赤枠で加筆)

■絵図 8.「肥前国高来郡之内高力摂津守領分」(内題)「肥前国高来郡之内高力摂津守領分図」(史料名)(長崎歴史文化博物館蔵、203cm×206cm、正保2年)

正保国絵図に関連する絵図と考えられている。浜城部分には「古城」とあり、正保2年には城としての機能が失われたことを示す。なお、『ふるさとの地名は語る 島原半島・有明町』に口絵として写真が掲載されている。

■絵図 9.「肥前国島原之城」(内題・史料名)(長崎歴史文化博物館蔵、縦38cm×横56cm、寛文頃)

寛文4(1664)年造立の「東照大権現宮」が図示されるから、寛文4年以降のものと見てよいであろう。また、浜城跡の西にある舟入の波戸に「新石垣」とあることから、波戸築造の直後に作成されたことが

窺える。寛文 12(1672)年の絵図にはすでに波戸が描かれているから(島原市教育委員会 2016,66 頁)、絵図は寛文頃のものとしてよいであろう。

絵図の大部分について、南北軸を東西軸の半分ほどに約めるデフォルメが見られるが、これは絵図が図示する範囲が南北約 2.5km×東西約 1km と長大なためであろう。とはいえ、島原城本丸・二ノ丸について言えば、その地理的精度は高い。「古城 東西七十間、南北五十五間」「此廻り石垣高サ一間余」と記すほか、堀跡らしき2区画に「魚タナ」・「同」と記す。

なお、長崎歴史文化博物館の公式ホームページを通して画像が公開されている(収蔵資料⇒資料検索⇒全収蔵資料検索)

■絵図 10.「島原城下図」(史料名)(本光寺常盤資料館蔵、縦 155cm×横 89cm、寛文 10 年)

年紀は常盤資料館の解説文によった。オープンスペースを黄色で着色する、「侍屋敷」と記載するなど、正保城絵図の特徴をいくつか備えている。この絵図の特徴は、古町・新町それぞれの範囲を明確に示していることである。

■絵図 11.「島原城廻之絵図」(外題)「肥前国島原城内外の絵図」(史料名)(熊本県立図書館蔵、縦 184cm×横 225cm、延宝 7 年～元禄 4 年?)

昭和 59 年、『図説日本城郭史』(新人物往来社、1984 年)にその写真が掲載され、早くから知られた絵図である。また、本稿の図Ⅳ-2 は本図の部分トレース図である。

この絵図には島原柏野付近に「本光寺」が図示されているが、同寺がここに寺基を移したのは寛文 9(1669)年のことであり、それ以降の作成であることは確実である。また、白土町通り筋の海側に石垣が築かれた様子が描かれるが、これは延宝 7(1679)年に築造されたものという(溝上 1995,18 頁)。さらに平尾明氏は元禄 4(1691)年以前のものと推定している(島原市役所復興災害課 1997,(4)-74 頁)。絵図には、短冊形地割と長方形街区が明確に描写されており、町名の記載から両側町であったことが分かる。なお写真が、『島原市文化財調査報告書』第 16 集 森岳城跡石垣調査報告書(2016 年、島原市教育委員会)126 頁に掲載されるほか、大型パネル写真が島原城天主閣内に展示されている。

■絵図 12.「御城下量地三分拾間之図」(内題)「島原城下図」(外題)(九州大学蔵、縦 114cm×横 148cm、寛政 4 年～天保 13 年)

九州大学記録資料館九州文化史資料部門に蔵する松本文庫の一部である。「天保十三年寅五月写」とあり、原図はそれ以前の作成である。島原大變後の復興中途の様子を描いているから、景観年代は寛政 4(1792)年の島原大變から数年を経た頃と推定される。題から実測図であることは明らかであり、実際、地理的精度は極めて高い。なお写真が、『島原市文化財調査報告書』第 16 集 森岳城跡石垣調査報告書(2016 年、島原市教育委員会)127 頁に掲載されている。

■『島原市街図』20・『島原市街図』25

計画機関は島原市、作業機関は国際航業株式会社で、平成 13(2003)年に測図したものを平成 18(2006)年に一部修正したものである。縮尺は 2500 分の 1、きわめて精密な実測図である。本稿は、この地図上に「島原大變前の島原地図」の間数をたどることで通り筋の復元を行った。なお、本図には国土地理院発行の地形図に見られるような図名はない。

## VIII. 註

【註1】 このとき山体のおよそ6分の1が崩れ、その土砂の総量は 3 億 4000 万立法メートルを超えている（長崎森林管理署ほか 2014,6 頁）。仮に東京ドームの容積を 124 万 m<sup>3</sup>とすればその 274 倍余に相当する。

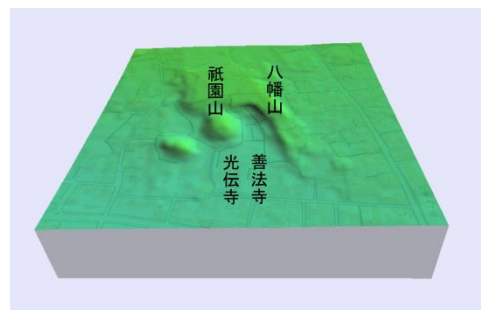
【註2】 たとえば近世初期の「黒田家譜」（川添ほか 1983）にも、城名に「の」「ノ」「之」を入れる用例が多く見出せる。姫路の城（39 頁）、三木の城（49 頁）、有岡の城（64 頁）、中津川の城（178 頁）、広島（279 頁）、伏見の城（323 頁）、柳川の城（446 頁）、福岡ノ城（461 頁）、名古屋の城（473 頁）などである。「の」「ノ」が入らない城名は、朝鮮の城のわずかに数例に過ぎない。

【註3】 ただし本稿は、現代における「はまのしろ」という読み方を否定するものではない。歴史的に「はまのじょう」と読んでいたとしても、現代において「はまのしろ」と読むことは可能であるし、「はまのしろ」の方が和語的であって、背景の島々や砂州、そして松の緑ともよくマッチするという考えもあろう。

【註4】 多久城は、hũa fortaleza por nome Takunojó（多久城という名で呼ばれる城）という名詞句の中で用いられる。原城は、Pagès（1869）844 頁 3 カ所に Farounojô とある。以下に一部を引用する。Ces derniers, dont le nombre s'élevait à trente-cinq mille, s'emparèrent des deux forteresses Fiyenjojô et Farounojô, et finirent par se rassembler tous dans la seconde place, et s'y retrancher. …Farounojô se trouvait en plaine, à huit lieues de Chimabara. …La citadelle de Farounojô possédait trois remparts et trois fossés.（日本語訳は、吉田（1940）325 頁に掲載）。

【註5】 「はるのじょう」が「はらのじょう」に転化した理由については、「佐野弥七左衛門島原覚書」に、「此ノ原ノ城ノ名古来春ノ城ト申候ヘトモ 上使御下以後原ノ城ト他国ノ者申候故所ノ者モ原ノ城ト申候事」とある。島原の乱までは「春ノ城（はるのじょう）」と言っていたが、幕府の上使が下向してからは、（攻城に加わった）他藩の者たちが「原ノ城（はらのじょう）」と言うので、土地の者も「原ノ城」と呼ぶようになった（堀内 1931,202 頁）、との意であろう。

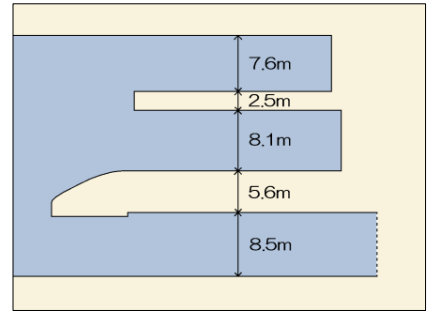
【註6】 このことは小野（1993,203-04 頁）によって既に指摘されている。小野は、「寺院の持つ大建築と広潤なる境内の軍事的意義は見逃すべからざるものである。従って城下建設者は城下防禦の軍事的見地に立って、寺院配置を実施した。」と述べている。「鈴録」第十六「城制 下」にも、「大寺大社ヲ皆急ナルトキノ取出（砦）ニ心得」とあり（今中ほか 1973,515 頁）、規模の大きな寺社は、砦の役割を果たすと考えられていたことが分かる。島原城下町の善法寺・光伝寺は、背後に比高約15mの丘陵（祇園山・八幡山）をひかえており、砦としての役割を担っていたと考えられる（図Ⅷ-1）。



図Ⅷ-1 善法寺・光伝寺背後の丘陵

※「電子国土 Web」色別標高図 3D 機能により作成。

【註7】 現存する大村藩舟蔵遺構(図Ⅷ-2)の場合、船渠の幅の平均(x)は、 $(7.6+8.1+8.5) \div 3=8.0666\dots\text{m}$ であり、「船渠と船渠の間の築き出し石垣」の幅の平均(y)は、 $(2.5+5.6) \div 2=4.05\text{m}$ である。このことから、島原藩の舟蔵についても、完成した4カ所と完成間近の1カ所、合わせて5カ所の舟蔵の幅の合計が  $5X+5Y=60.666\dots\text{m}$ と類推可能であり、これに最も近い間数は30間(約59.09m)である。また、図Ⅴ-3の○4-○5ラインの長さはほぼ80間で、この○4-○5ライン上に舟蔵が設けられたことも多くの絵図から確認できる。以上の事実を勘案し、また全体の文脈を考えた上で、船渠に関する記事の現代語訳を作成した。



図Ⅷ-2 大村藩舟蔵遺構

【註8】 島原の乱の勃発当初における島原の様子を報告した「道家七郎右衛門口上の覚」には、寛永14年10月下旬における島原城、およびその近辺の様子が記されているが、その中に次のようなものがある。「古城の下二舟二三十艘ほと入申所御座候か、入こみ候ても出可申様無之候」(古城の下に、舟を20艘から30艘ほど停泊できる舟入があるが、舟が入る様子は見てとれても、出る様子はない)。この「古城」が浜城跡を指すのであれば、この頃すでに浜城は、城としての機能を失っていたことになる(鶴田 1994,51 頁)。

【註9】 「道帳」は、正保期から慶安期にかけて、江戸幕府が諸大名に命じて作らせた、大道・中道・小道・灘道・船路の報告書で、原則として令制国ごとに編纂された。その多くに古城に関する記述がみられる。「正保期の城目録」とは、正保城絵図の提出と同じころ、幕府に提出されたと考えられる、城の概要を記した文書である(定着した歴史学用語はない)。これについては筆者が別稿で報告している(西田 2015)。

【註10】 ただし、寛永末年頃からかなり精密な実測図が作成されるようになったようである。実測図である「寛永江戸全国」(臼杵市歴史資料館②-153)は寛永期まで遡る可能性がある(同資料館では年次を「寛永～正保頃か」と比定している)。また、正保城絵図の中には図Ⅶ-6のような精密な実測図もある。

【註11】 空間学における位相幾何学(トポロジー)とは、図形を面積や長さなどの絶対的な位置や数量でなく、点や線、面などのつながりかたによって解釈するものである。例えば、三角形と四角形を同じ図形であるとし、三次元では立方体と球体を区別しない。空間学の分野でも、複雑な現実の空間を抽象化し、おもに形と位置を記述、分析する手法として、これまで多くの研究で用いられてきた。(日本建築学会 2005,255 頁)

【註12】 ある空間の敷地が実際は矩形でなかったとしても、矩形に近い形として認知し、湾曲した敷地形状であっても、矩形または矩形の組み合わせとして認知していた事例が報告されている(山田 2011)。探索書付図については表象空間・認知地図との関わりも指摘できよう。

## IX. 参考文献

---

- 愛媛県歴史文化博物館編『伊予の城めぐり ―近世城郭の誕生―』（イヨテツケーターサービス、2010 年）。
- 今中寛司ほか編『荻生徂徠全集』第六卷（河出書房新社、1973 年）。
- 小野晃嗣『近世城下町の研究・増補版』（法政大学出版局、1993 年）。
- 大矢真一校注『塵劫記』（岩波書店、1977 年）。
- 鏡味完二ほか『地名の語源』（角川書店、1977 年）。
- 学習研究社編『歴史群像シリーズ特別編集 戦国九州三国志 島津・大友・龍造寺の戦い』（学習研究社、2008 年）。
- 神田千里『島原の乱』（中央公論新社、2005 年）。
- 川添昭二ほか校訂『新訂黒田家譜』第一卷（文献出版、1983 年）。
- 国書刊行会編『続々群書類従』第四（続群書類従完成会、1970 年 a）。
- 国書刊行会編『続々群書類従』第十二（続群書類従完成会、1970 年 b）。
- 佐賀県立図書館編『佐賀県史料集成古文書編』第 13 巻（佐賀県立図書館、1972 年）。
- 佐藤甚次郎『公図 読図の基礎』（古今書院、1996 年）。
- 新村出『広辞苑 第六版』（岩波書店、2008 年）。
- 島原郷土史会『島原藩の地方史料』第一輯（島原市郷土史会、1980 年）。
- 島原市教育委員会編『島原市猛島神社歴史資料調査報告書』（島原市教育委員会、1998 年）。
- 島原市教育委員会編『島原市文化財調査報告書』第 16 集 森岳城跡石垣調査報告書（島原市教育委員会、2016 年）。
- 島原市教育委員会編『島原鉄砲町 島原市鉄砲町伝統的建造物群保存対策調査報告書』（島原市教育委員会、2009 年）。
- 島原市市長公室編『島原の今と昔』（島原市、1990 年）。
- 島原市仏教会『たいへん 島原大変二百回忌記念誌』（島原市仏教会、1992 年）。
- 島原市役所災害復興課編『島原市保有寛政四年島原大変関連古図集』（島原市役所災害復興課、1997 年）。※部数限定の資料集（島原図書館に架蔵）。
- 白峰旬『豊臣の城・徳川の城 戦争・政治と城郭』（校倉書房、2003 年）。
- 白峰旬『幕府権力と城郭統制』（岩田書院、2006 年）。
- 白峰旬「中川家文書「御隣国城下在々様子聞書之帳」、「御隣国聞合之帳」について」『別府大学大学院紀要』11 号（別府大学研究出版委員会、2009 年）。
- 新人物往来社編『古絵図、発掘・古写真が語る 戦国の城 近世の城』（別冊歴史読本 14 第 20 巻 第 36 号）（新人物往来社、1995 年）。
- 鈴木一義ほか「江戸初期の方位及び角度の概念から見た測量術の形成についての一考察」『国立科学博物館研究報告 E 類 理工学』第 32 号（国立科学博物館、2009 年）。
- 千田嘉博『戦国の城を歩く』（筑摩書房、2003 年）。
- 武雄市図書館・歴史資料館編『肥前・一国道則帳』（武雄市図書館・歴史資料館、2013 年）。
- 地学会編『地学雑誌』（地学会、1892 年）。
- 地名編纂委員会編『日本地名大辞典』別巻Ⅲ 日本地名総覧（角川書店、1990 年）。

鶴田倉造編『原史料で綴る 天草島原の乱』(本渡市、1994 年)。

外山幹夫『肥前 有馬一族』(新人物往来社、1997 年)。

鳥羽正雄『新装版 日本城郭辞典』(東京堂出版、1995 年)。

土井忠生ほか編『邦訳 日葡辞書』(岩波書店、1980 年)。

長崎県教育委員会編『長崎県文化財調査報告書』第 206 集 長崎県中近世城館分布調査報告書Ⅱ 地名表・分布地図編(長崎県教育委員会、2010 年)。

長崎森林管理署ほか編『雲仙・普賢岳と眉山の治山』(発行所不明、2014 年)。

鍋島報効会編『御城下絵図を読み解く』第二版(鍋島報効会、2016 年)。

西田博「正保期の城目録をめぐる」『歴史を歩く時代を歩く: 服部英雄退職記念誌』(九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室、2015 年)。

日外アソシエーツ編集部編『苗字8万よみかた辞典』(日外アソシエーツ、1998 年)。

日本建築学会編『建築・都市計画のための空間学事典』(井上書院、2005 年)。

根井浄「キリシタン伝来と有馬・島原地方の寺院」『日本歴史』1983 年 12 月号/第 427 号(吉川弘文館、1983 年)。

根井浄「島原の「ゑけの川」」『広報しまばら』平成 29 年 1 月号(島原市市長公室、2017 年)。

林銑吉編『島原半島史』上巻(長崎県南高来郡市教育会、1954 年 a)。

林銑吉編『島原半島史』中巻(長崎県南高来郡市教育会、1954 年 b)。

林銑吉編『島原半島史』下巻(長崎県南高来郡市教育会、1954 年 c)。

福田千鶴『御家騒動』(中央公論新社、2005 年)。

藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』(柳原書店、1983 年)。

堀内信編『南紀徳川史』第六冊(南紀徳川氏刊行会、1931 年)。

松田毅一ほか訳『フロイス日本史』9(中央公論社、1979 年)。

松本直子ほか編『認知考古学とは何か』(青木書店、2003 年)。

溝上慶治読解『深溝世紀』巻八 烈公 中(島原市教育委員会、1995)。

宮本次人「島原キリシタン史を読む ～島原教会は〇〇にあった～」『郷土史を学ぼう会 資料』(郷土史を学ぼう会、2013 年)。

宮本雅明『都市遺産の保存研究』(中央公論美術出版、2012 年)。

室町時代語辞典編集委員会編『時代別 国語大辞典』室町時代編 三(三省堂、1994 年)。

村上直次郎訳『新異国叢書』3 イエズス会日本年報 上(雄松堂書店、1969 年)。

山田あすか「従来型小学校での「記憶+に残る場面」にみる学校空間 成人による振り返りに基づく学校建築空間の再考 その1」『日本建築学会計画系論文集』第 76 巻 第 669 号(日本建築学会、2011 年)。

吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史』(下)(岩波書店、1940 年)。

吉永正春『九州戦国合戦記 増補改訂版』(海鳥社、2006 年)。

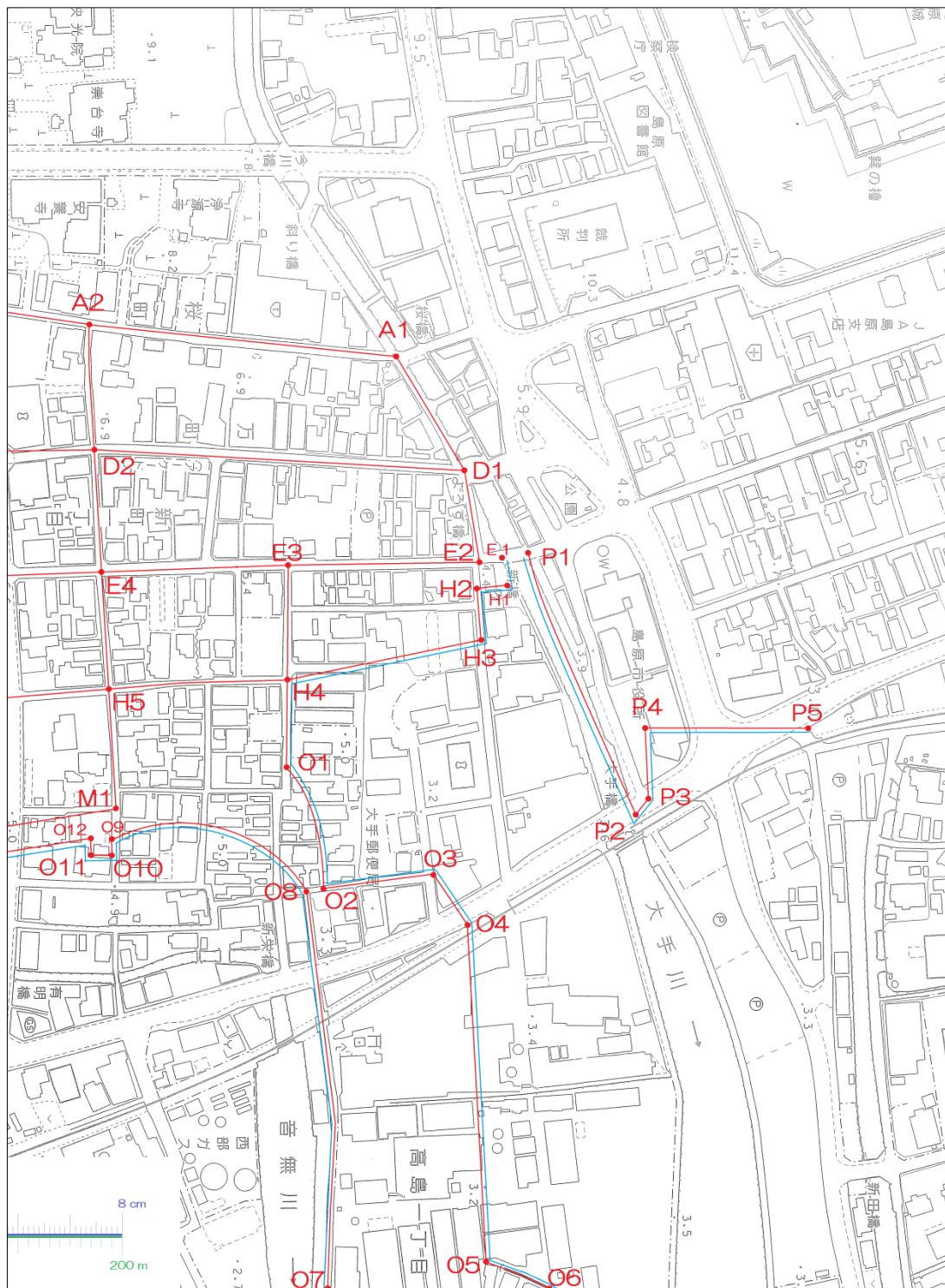
歴史地理学会編『歴史地理学』第 43 巻 1 号(通巻第 202 号)(歴史地理学会、2001 年)。

若林幹夫『地図の想像力』(講談社、1995 年)。

Léon Pagès, Histoire de la religion chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'à 1651, Première Partie Texte, Paris, 1869.



図V-3 島原城下町の復元図（拡大図）



【謝辞】 都市に関する論文を書いたのは『日本歴史』以来、実に二十年ぶりである。その頃とは大きく異なり、人脈・資金はなきに等しかったが、多くの方々の支えと励みがあった本稿を完成することができた。特に、宇和島市立中央図書館の渡辺晃氏には、近世初期宇和島城の絵図について数多くのご教示を賜り、常盤歴史資料館館長の片山弘賢師には、史料の閲覧・撮影に便を図っていただいただけでなく、島原城下町に関するさまざまな研究を紹介していただいた。そして、島原市教育委員会の宇土靖之氏には、本稿で基本資料とした絵図、そしてその他の絵図についても様々なご教示をいただいた。ここに記して諸賢のご厚恩に深謝申し上げます。

(にしだ ひろし、〒854-0074 長崎県諫早市山川町 18-4)